

# 真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』の翻刻

石 井 修 道

## 一 『裴休拾遺問』について

『裴休拾遺問』とは圭峰宗密（七八〇—八四一）が、裴休（七九七—八七〇）・蕭俛・史山人・温造尚書の問いに答えた書簡集である。この著が所蔵されている真福寺は、名古屋の大須観音で知られる真言宗智山派の別格本山の北野山真福寺宝生院である。『裴休拾遺問』の所在については、黒板勝美博士編輯の『真福寺善本目録続輯』（昭和十一年五月）に次のようにすでに指摘されていたのである。<sup>(1)</sup>

裴休拾遺問 一帖。縦七寸五分、横五寸二分。仁治二年写本、粘葉装、紙数卅枚。

（奥書）仁治二年辛丑神無月四日越中国新州郡新條庄於戊剋書写之了。道願房善縁生年卅九歳。南無三宝、

南無三宝。（四四五—四四六頁）

特にこの目録から知られることは、この写本が仁治二（一二四一）年に書写された鎌倉期の貴重本であることである。

大体の内容は内題に次のようになるところからうかがえよう。

裴休拾遺問△釈蕭相公見解・答史山人十問・答温尚書（所問）□・申明復礼法師問・達磨四行観・惟頌覺地頌附▽

（△ ∨ の印は割注。以下同）

このうち『答温尚書所問』を終って、尾題の「裴休拾遺問」があり、後の三文献は書写されていない。

書写された文献をみると、「裴休拾遺問」は『中華伝心地禅門師資承襲図』と呼ばれる己統藏経本と一致し、「釈蕭相公見解」と「答史山人十問」と「答温尚書所

問」の三文献は、『景德伝灯録』卷十三の終南山圭峯宗密章に所収の語と対応させることができ、「答史山人十問」は『祖堂集』卷六の草堂和尚の章、「答温尚書所問」の前半は『林間録』巻上にもみえるものである。

現存文献の中で知られる内容ばかりであるから『斐休拾遺問』は全く未知の新出資料というような資料価値はないとしても、『中華伝心地禅門師資承襲図』そのものが次の跋で知られるようにきわめて貴重な文献であるところから、校定本作成のためにも真福寺本は貴重なことがわかるであろう。つまり、

去明治四十三年十二月、統藏経編集長中野達慧師曰、此書者、希代之書、而於他家無所蔵。請謄写之、以編入統藏。辰乃速応請求、許謄写。且記其事実、以授焉。于時明治四十有四年一月吉旦。四海唱道五十四伝灯沙門静照日辰、謹識於日蓮宗大本山妙顯精舎方丈。(己統藏経卷一〇—四三八c)

とあり、しかも真福寺本には、内容的にすぐれた所があつて、解説に有益な示唆が与えられるのである。<sup>(2)</sup>また真福寺本は己統藏経本に欠けていた最後の部分が存するのである。ただ惜むらくは、前に二丁を欠いている。

<sup>(3)</sup>『中華伝心地禅門師資承襲図』の研究は、宇井伯寿博士・鎌田茂雄博士<sup>(4)</sup>および柳田聖山氏<sup>(5)</sup>などによってなされ、

近年まで当時の禅宗史を知る上に貴重な文献であるといわれ、特に馬祖道一(七〇九—七八八)系の洪州禅と荷沢禅の相違を理解するのに利用されてきたのである。貴重な文献であることはわかりながらも、現在まで己統藏経に収められた本を唯一とし、部分的に解説するのに、不明瞭な箇所を残していた。中でも書名そのものについても疑問が出されていたのである。

すなわち己統藏経本の『中華伝心地禅門師資承襲図』という書名は、もとの名ではないであろうと想像されていたのであるが、真福寺本によると、「中華伝心地禅門師資承襲図」とは、達磨より荷沢神会を経て、十世遂州円に至る系譜を中心とする系譜図に対する名前であることが解明できたのである。よってこの書には『承襲図』という名前はなくて、『圭峯禅師碑銘』、『宋高僧伝』、『法界宗五祖略記』にいう

酬答書(鎌田茂雄博士『宗密教学の思想史的研究』九七頁。東京大学出版会。昭和五〇年三月)

の中に含まれていて、斐休をはじめとして道俗に対する宗密の書簡集が一つに集められていたことになろう。<sup>(7)</sup>

圭峰宗密は、華嚴宗では、杜順—智儼—法藏—澄観—宗密と並べて第五祖に数えられ、禅宗では、荷沢神会—磁州法如—益州惟忠—遂州道円—宗密の系譜を自己主張

し、『華嚴経』と荷沢禅による教禅一致思想、頓悟漸修論の主張者として知られてきた。また、(1)外道禅、(2)凡夫禅、(3)小乘禅、(4)大乘禅、(5)最上乘禅の五種の禅の分類や、(1)将識破境教(密意依性説相教に属す)と息妄修心宗(北宗)、(2)密意破相顯性教と泯絶無寄宗(牛頭宗)、(3)顯示真心即性教と直顯心性宗(洪州宗・荷沢宗)の教の三教と禅の三宗の対配より教禅一致の価値体系を作り、さらに洪州宗より荷沢宗の優位を従来知られていた『承襲図』で示したことで有名である。

この圭峰宗密の研究は、禅宗との関連を抜きにしてはできない。胡適博士は「跋斐休的唐故圭峯定慧禪師伝法碑」(中央研究院、歴史語言研究所集刊第三四本、故院長胡適先生記念論文集上冊、中華民國五一年一月二月)の論文で、

浄衆神会——聖寿南印——道円——宗密

の新しい宗密の系譜を主張された。その後、鎌田茂雄博士は『宗密教学の思想史的研究』の著で宗密の思想史的研究を進められた。

また柳田聖山氏は「新統灯史の系譜叙の一」(『禅学研究』五九号、昭和五三年一月)の中で、

宗密が禅宗史研究に重きをなす歴史的意思是、じつは歴代法宝記に対する対決的姿勢から来ている。(七頁)

と新しい視点を発表され、さらに、宗密の新出資料を指摘して、

今、宗密の著作そのものに深入りできないが、虚構にみちたこの人の伝記と著作のすべては、その動機に溯って洗い直す必要があることは、幾度くり返しても過ぎることはあるまい。(二四頁)

とあって、宗密研究は最も新しく、かつ今後に深めていく必要のある分野であることをいわれている。

ここに紹介する宗密の著作に関する論文は、先覚に導びかれて新出資料と従来資料を校合し、校定して翻刻したものすぎない。唐代の中国禅宗史の主流を占めていった頓悟頓修の洪州宗と、宋代・明代まで永く中国思想界を魅了していった頓悟漸修の荷沢宗の違いを明確に示したこの文献は、今後多方面からの研究が待たれる。

ここで一応書誌的な事をまとめておこう。『斐休拾遺問』は、真福寺文庫では、函第七一合の五八号として収められ、その形態を記せば次のとおりである。

- 一、帖数 一帖
- 一、装幀 粘葉装
- 一、紙質 楮紙
- 一、大きさ 縦二三センチ、横一四・三センチ
- 一、紙数 三三二紙(表紙共)、内二・三丁の二紙を欠く。

- 一、行数 一紙一六行
- 一、字数 一行一六字（一八字）
- 一、書写年代 仁治二（一二四一）年
- 一、筆者 道願房善縁
- 一、外題 斐休拾遺問
- 一、内題 斐休拾遺問（積蕭相公見解・答史山人十問  
・答温尚書所問・申明復礼法師問・達磨四  
行觀・惟頸覺地頌附）
- 一、尾題 斐休拾遺問
- 一、序跋 なし
- 一、校合 なし
- 一、識語 あり
- 注
- (1) 『斐休拾遺問』を調査する機会を得たのは駒沢大学仏教学部助教授の伊藤隆寿氏の研究発表の指摘による。その経過については、石井修道「伊藤隆寿氏発見の真福寺文庫所蔵の『六祖壇經』の紹介——恵昕本『六祖壇經』の祖本との関連——」（駒沢大学仏教学部論集）一〇号、昭和五四年九月）に述べた。
- (2) 『斐休拾遺問』の書名は椎名宏雄氏の指摘によると宋代の書目に存するという。なお簡単な紹介は、石井修道「洪州宗について——真福寺文庫所蔵の『斐休拾遺問』と『六祖壇經』の紹介に因んで——」（印度学仏教学研究）二八卷一号、昭和五四年二月）を参照されたい。

- (3) 宇井伯寿博士訳注『禪源諸詮集都序』（岩波書店、昭和四一年一月）、および同著「中華伝心地禪門師資承襲図の佚文について」（『第三禅宗史研究』所収。岩波書店、昭和一八年四月）が、『承襲図』の研究の詳細でしかも学界を裨益したものである。
- (4) 鎌田茂雄博士訳注『禪源諸詮集都序』（筑摩書房、昭和四六年二月）および『宗密教学の思想史的研究』。
- (5) 柳田聖山氏「伝心法要・宛陵錄解説」（入矢義高氏訳注『伝心法要・宛陵錄』所収。筑摩書房、昭和四四年二月）などに、『承襲図』の中の宗密の洪州宗批判を解説され、その後にもこの問題をしばしば論及されている。
- (6) 従来『承襲図』の引用に対して、『林間録』巻上に「圭峰答裴相国趣状」とか「草堂禪師賤要」と呼ばれたり、明恵の弟子の証定の『禪宗綱目』に「圭山答裴休問書」とあり、天台智礼は『四明尊者教行録』巻四に「圭峰後集」と呼ぶなどの例があったとされる。（鎌田博士の前掲の訳注書三七四頁）。また田中良昭氏の「敦煌本『禪源諸詮集都序』残巻考」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三七号、昭和五四年三月）では、『承襲図』は『道俗酬答集十卷』（六八頁）に当ると思われる。なお真福寺本の「中華伝心地禪門師資承襲圖」とある前の文は次のようになってい  
右且略叙諸宗師承、大概如此。然縁傍正横豎、交雜難記、今畫出爲圖、一覽不遺於心府。謹連次後。（傍点筆者）  
これからもわかるとおり、法承図こそ「中華伝心地禪門師資承襲圖」の名にふさわしいことがわかるであろう。
- (7) 石井の印仏研の前掲論文参照されたい。

二 『裴休拾遺問』の翻刻

凡例

一、本資料は、真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』を底本とし、対校できる諸種の文献と対校し、段落ごとに番号を付して、その異同を下段に注記したものである。あくまでも真福寺文庫本を紹介することを主眼とし、校定を意図したものではない。

一、内容は鎌田茂雄博士著『禪源諸詮集都序』（筑摩書房、昭和四六年二月）所収の『中華伝心地禪門師資承襲図』の「二二」の段落に、「二三」蕭相公の見解を釈す、「二四」史山人の十問に答える、「二五」温尚書の所問に答える、の三つを加えた計二五に分けた。

一、底本と対校本との対校箇所・所在、及び注記に用いた略号は次のとおりである。

〔底本〕

『裴休拾遺問』 仁治二（一二四一）年書写 真福寺文庫所蔵 函七一―五八号 ……………（底）

〔対校本〕

〔一〕～〔二二〕 『中華伝心地禪門師資承襲図』 卍統蔵経巻一一〇……………（卍）

〔八〕～〔二二〕 『法集別行録節要并入私記』 柳田聖山主編禅学叢書之二（中文出版社）……………（法）

〔二三〕～〔二五〕 『景德伝灯録』（宋版） 柳田聖山主編禅学叢書之六（中文出版社）……………（景）

〔二四〕 『祖堂集』 広文書局……………（祖）

〔二五〕 『林間録』 卍統蔵経巻一四八……………（林）

一、底本の印刻に際しては、読みがな、返り点などを原文に忠実なることを原則としたが、校定可能な場合は補正して、下段に注記した。

一、改行は底本を参考にし、適宜改めた。

一、本文の使用文字も、漢字および送りがなはできうる限り原文に忠実なることを原則とした。

一、底本の欠丁の部分も、卍統蔵経本で補い、「」の印で区別し、送りがな、返り点は付さず、句読点のみとし、底本の補筆の部分も「」の印で区別した。また細注の部分は底本等は割注となっているが、∧ ∨を付して割り書きにしなかった。

一、図（法系の）の部分で、誤りと思われる実線は、宗密の他の著述を参考に点線を付して補正した。

一、内容目次は底本等にはないが、鎌田博士の内容目次を参考にし、便宜上最初に加えた。  
 一、文中の(一)内の算用数字とa bは丁数の表裏を表わす。但し底本は二丁と三丁を欠く。

目次

- (一) はじめに——斐休の問に答えて——
- (二) 牛頭宗
- (三) 北宗
- (四) 南宗
- (五) 荷沢宗
- (六) 洪州宗
- (七) 中華伝心地禅門師資承襲図
- (八) 禅宗の教えを説く心がまえ
- (九) 以心伝心、不立文字の意味
- (一〇) 北宗の教えと批評
- (一一) 洪州宗の教えと批評
- (一二) 牛頭宗の教えと批評
- (一三) 三宗の総評
- (一四) 荷沢宗の教え
- (一五) 各宗批判の根拠——二義二門——
- (一六) 摩尼珠の喩え(一)——北宗——
- (一七) 摩尼珠の喩え(二)——洪州宗——
- (一八) 摩尼珠の喩え(三)——牛頭宗——

- 〔一〇〕 摩尼珠の喩え四——荷沢宗——
- 〔一一〕 空寂の知とは何か
- 〔一二〕 荷沢宗と洪州宗の相違
- 〔一三〕 頓悟漸修よりみた諸宗の特質
- 〔一四〕 蕭相公の見解を釈す
- 〔一五〕 史山人の十問に答える
- 〔一六〕 温尚書の所問に答える

裴休<sup>1</sup>拾遺問八釋蕭相公見解・答史山人十問・答温尚書<sup>〔所問〕</sup>□□・申明復禮法師問・達磨四行觀・惟頓覺地頌附▽

〔一〕禪法大行、宗徒各異、互相詆訛、莫肯會同。切要<sup>ニ</sup>辨其源流、知其深淺、  
 比雖留意、未得一分曉。撰錄時、恐有差錯、伏望略爲條流、分別、  
 三五紙示、及太祖列南北宗、南宗中、荷澤宗、洪州宗、牛頭宗、具言<sup>ニ</sup>  
 其深淺頓漸得失之要、便爲終身龜鏡也。裴休狀<sup>10</sup>。

宗密釋<sup>11</sup>。

奉<sup>12</sup>批示以禪門宗徒各異、不肯會<sup>1a</sup>同、要<sup>1b</sup>辨<sup>1c</sup>南北宗、荷澤・  
 洪州・牛頭等源流深淺頓漸得失者、然達磨所傳、本無<sup>1d</sup>二法。後隨人<sup>1e</sup>變。  
 故以殊途、肩之俱非、會之則皆是。前者所述<sup>1f</sup>傳記、但論直<sup>1g</sup>下宗。若

1〔一〕ハ「裴」以下ヲ「中華傳心地禪門師資承襲圖」ニ作ル

1〔二〕ハ「禪」ノ前ニ「内供奉沙門宗密答裴相國問」ト「裴休相國問」ノ語アリ

2〔三〕ハ「曉」ヲ「明」ニ作ル

3〔四〕ハ「錄」ノ下ニ「之」アリ

4〔五〕ハ「太祖」ヲ「大抵」ニ作ル

5〔六〕ハ「南北」ヲ「北宗南」ニ作ル

6〔七〕ハ「宗」ナシ

7〔八〕ハ「頭」ノ下ニ「等」アリ

8〔九〕ハ「深淺」ヲ「淺深」ニ作ル

9〔一〇〕ハ「裴」ナシ

10〔一一〕ハ「狀」ヲ「再拜」ニ作ル

11〔一二〕ハ「釋」ヲ「禪師答」ニ作ル

12〔一三〕ハ「奉」以下三十五字ヲ欠ク

13〔一四〕ハ「以」ヲ「似」ニ作ル

14〔一五〕ハ「之」ノ下ニ「卽」アリ

要辨<sup>ニ</sup>諸宗師承<sup>ヲ</sup>、須知有傍<sup>ニ</sup>有正<sup>一</sup>。今且叙師資傍正<sup>ヲ</sup>、然後述言教深淺<sup>一</sup>。自然見達磨之心、流<sup>ニ</sup>至<sup>一</sup>荷澤<sup>ニ</sup>矣。

15 (卅)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル  
16 (卅)ハ「下」ノ下ニ「一」アリ  
17 (卅)ハ「深淺」ヲ「淺深」ニ作ル

(二)一牛頭宗者、從四祖下<sup>ニ</sup>傍出<sup>一</sup>。根本有慧融禪師者<sup>ト云フ</sup>、道性高簡、神聽<sup>ニ</sup>慧利<sup>一</sup>、先因<sup>ニ</sup>多年窮<sup>ニ</sup>究諸部般若之教<sup>一</sup>、已悟諸法<sup>一</sup>(1b)本空迷情妄執、後遇四祖、印其所解空理、然於空處顯示不空妙性故、不俟久學、而悟解洞明。四祖語曰、此法從上只委一人、吾已付囑弟子弘忍訖、△即五祖也。▽汝可別自建。後遂於牛頭山、別建一宗、當第一祖、展轉乃至六代。△後第五祖師智威有弟子馬素、素有弟子道欽、即徑山是也。▽此一宗都不關南北二宗。其南北二宗、自出於五祖門下。五祖已前、都未有南北之稱。

1 (卅)ハ「一」ナン  
2 (底)ハ「者」ナキモ、(卅)ニヨリ補ウ  
3 (卅)ハ「聽慧」ヲ「慧聰」ニ作ル  
4 (底)ハ「法」ノ下ヨリ「二」ヲ欠ク。  
(卅)ニヨリ補ウ

(三)二北宗者、從五祖下傍出。謂有神秀等二十人、同是五祖忍大師弟子。大師印許各堪爲一方之師故、時人云、忍生十子。△能和尚直承其嫡、非此十數也。▽於中秀及老安・智詵道德最著、皆爲高宗皇帝之所師敬、子孫承嗣、至今不絕。就中秀弟子普寂、化緣轉盛、爲二京法主三帝門師。但稱達磨之宗、亦不出南北之號。

1 (卅)ハ「二」ナキモ、補ウ  
2 (卅)ハ「子」ヲ「字」ニ作ルモ改ム

(四)三南宗者、即曹溪能大師、受達磨言旨已來、累代衣法相傳之本宗也。後以神秀於北地大弘漸教、對之故曰南宗。承稟之由、天下所知、故不叙也。後

1 (卅)ハ「三」ナキモ、補ウ

欲減度、以法印付囑荷澤、令其傳嗣。傳嗣之由、先已叙之呈上。然甚闕略、今蒙審問。更約承上祖宗傳記稍廣。傳中叙能和尙處中間云、有襄陽僧神會、俗姓高、年十四、入即荷澤也。荷澤是傳法時所居之寺名。▽來謁和尙。和尙問、知識遠來、大艱辛、將本來否。答、將來。若有本、即合識主。答、神會以無住爲本、見即是主。大師云、遮沙彌爭敢取次語。便以杖亂打。神會杖下思惟、大善知識歷劫難逢、今既得遇、豈惜身命。大師察其深悟情至、故試之也。△如堯知舜歷試諸難。▽傳末又云、和尙將入涅槃、默授密語於神會、語云、從上已來、相承准的、只付一人、內傳法印、以印自心、外傳袈裟、標定宗旨。然我爲此衣、幾失身命。△數被北宗偷衣之事、在此傳之前文、今不能錄。▽達磨大師懸記云、至六代之後、命如懸絲、即汝是也。△此言在叙達磨傳中。▽是以此衣宜留鎮山。汝機緣在北、即須遇嶺。二十年外、當弘此教、廣度衆生。和尙臨終、門人行滔・超俗・法海等問和尙、法何所付。和尙云、所付囑者、二十年外、於北地弘揚。又問誰人。答、若欲知者、大庾嶺上、以網取之。△相傳云、嶺上者高也。荷澤、姓高、故密示耳。▽

〔五〕四荷澤者、全是曹溪之法。無別教旨、爲對洪州傍出故、復標其宗號。承

1〔七〕ハ「四」ナン

2 (七)ハ「授」ヲ「受」ニ作ルモ改ム  
3 (七)ハ「遇」ヲ「過」ニ作ル  
4 (七)ハ「教」ヲ「法」ニ作ル  
5 (底)ハ「楊」ニナルモ、(七)ニヨリ改ム  
6 (七)ハ「答」ノ下ニ「云」アリ  
7 (底)ハ「高」ナキモ、(七)ニヨリ補ウ

稟之由、如上説。然能和尙減度後、北地中、漸教大行。△亦如上叙。▽因成(4a)頓門弘傳之障、曹溪傳授碑文、已被磨換。故二十年、宗教沈隱。△大師遭百艱難等事、皆如先所呈略傳、廣在本傳、他日具呈。▽天寶初、荷澤入洛、大播斯宗、四方顯秀門下師承是傍、法門是漸。既二宗雙行。時人欲揀其異、故標南北之名。南北之名自此。

問、荷澤爲第七祖、何不立第八九十。後既不立、何妨據傳衣爲憑、但止第六。答、若據眞諦、本絕名數、一猶不存、何言六七。今約俗諦、師(4

b)資相傳、順世之法、有其所表。如國立七廟、七月而葬、喪服七代、福資七七、△道釋皆同。▽經說七佛、持念遍數、壇場物色、作法方便、禮佛

遶佛、請僧之限、皆止於七。過則二七三七、乃至七七、不止於六、不至八九。今傳授儀式、順世生信、何所疑焉。故德宗皇帝、貞元十二年、勅皇

太子、齊諸禪師、楷定禪門宗旨、搜求傳法者傍正、遂有勅下、立荷澤大師、爲第七祖、內神龍寺。(5a)見有名記。又御製七代祖師讚文、

見行於世。

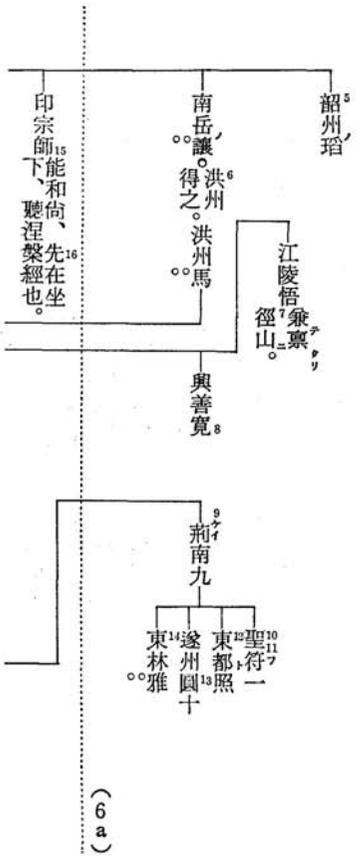
(六)五洪州宗者、其先則六祖下傍出。謂有禪師、姓馬、名道一。先是劍南金和尚弟子。△金之宗源則智旽也。亦非南北。▽高節至道、遊方頭陀、隨處

2 (一)ハ「由」ノ下ニ「已」アリ  
3 (一)ハ「地中」ヲ「宗」ニ作ル  
4 (底)ハ「弘傳」ノ二字虫損  
5 (一)ハ「年」ノ下ニ「中」アリ  
6 (一)ハ「百」ノ下ニ「種」アリ  
7 (一)ハ「事」ナキモ、(七)ニヨリ補ウ  
8 (底)ハ「宗四」ヲ「門」ニ作ル  
9 (一)ハ「南」以下四字ナシ  
10 (一)ハ「此」ノ下ニ「而始」アリ  
11 (一)ハ「問」ノ下ニ「既」アリ  
12 (一)ハ「八」ノ下ニ「乃至」アリ  
13 (一)ハ「七」ヲ「祖」ニ作ル  
14 (一)ハ「遠」ヲ「遠」ニ作ル  
15 (一)ハ「授」ヲ「受」ニ作ル  
16 (一)ハ「授」ヲ「受」ニ作ル  
17 (一)ハ「齊」ヲ「集」ニ作ル  
18 (一)ハ「者」ナシ  
19 (一)ハ「名」ヲ「銘」ニ作ル  
20 (底)ハ「制」ニナルモ、(七)ニヨリ改

1 (一)ハ「五」ナシ  
2 (一)ハ「其」ナシ  
3 (一)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

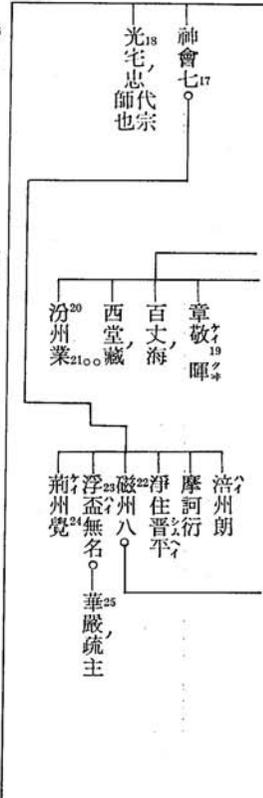
坐禪。乃至南岳、遇讓禪師、論量宗教、理不及讓。方知傳衣付法、曹溪爲嫡。及迴心道稟、便住虔州。洪州、或山或郭、廣開供養、接引道流。後於洪州開元寺、弘傳讓之旨。故時人號爲洪州宗、(5b)也。讓則曹溪門下傍出之汎都。△曹溪此類數有千餘。▽是荷澤之同學。但自率身修行、本不開法因。馬和尚、大揚其教、故成一宗之源。

〔七〕右且略叙諸宗師承、大概如此。然緣傍正橫豎、交雜難記、今畫出爲圖、一覽不遺於心府。謹連次後。



(6a)

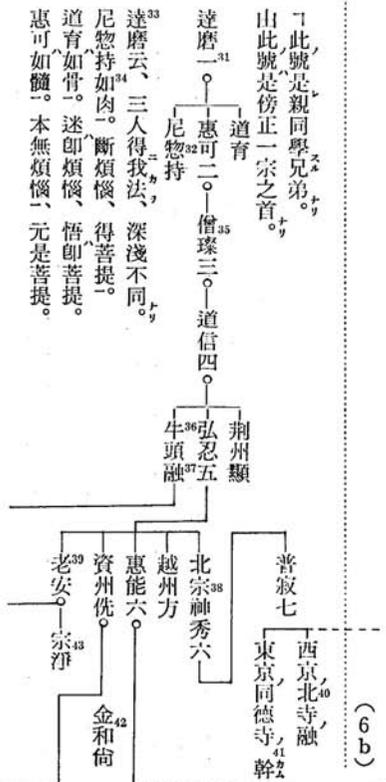
- 4 (正)ハ「子」ノ下ニ「也」アリ
- 5 (正)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル
- 6 (正)ハ「先」ヲ「洗」ニ作ル
- 7 (正)ハ「岳」ヲ「嶽」ニ作ル
- 8 (正)ハ「及」ヲ「乃」ニ作ル
- 9 (正)ハ「道」ヲ「遵」ニ作ル
- 10 (正)ハ「度」ヲ「處」ニ作ル
- 11 (正)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル
- 12 (正)ハ「汎都」ヲ「派徒」ニ作ル
- 13 (正)ハ「有」ヲ「可」ニ作ル
- 14 (底)ハ「卒」ニナルモ、(正)ニヨリ改ム
- 15 (底)ハ「楊」ニナルモ、(正)ニヨリ改ム
- 1 (底)ハ「難」ナキモ、(正)ニヨリ補ウ
- 2 (正)ハ「圖」ノ下ニ「冀」アリ
- 3 (正)ハ「府」ヲ「腑」ニ作ル
- 4 (底)ハ次ニ圖アリ、(正)ニモ圖アルモ、大イニ異ルタメ、(正)ハ参考トシテ相
- 5 (正)ハ「韶州瑄」ナン
- 6 (正)ハ「八洪州得之」ナン
- 7 (正)ハ「徑」ヲ「敬」ニ作ル
- 8 (底)ハ「寬」ヲ「寧」ニ作ルモ、(正)ニヨリ改ム
- 9 (正)ハ「荆南九」ヲ「益州南印」ニ作ル
- 10 (正)ハ「聖符一」ヲ「益州如」ニ作ル
- 11 (底)ハ「符」ハ「壽」ノ誤リカ
- 12 (正)ハ「東都照」ヲ「東京神照」ニ作ル
- 13 (正)ハ「圓十」ヲ「道圓」ニ作ル
- 14 (正)ハ「東林雅」ヲ「建元玄雅」ニ作ル
- 15 (正)ハ「師」ノ上ニ「法」アリ
- 16 (正)ハ「先」以下九字ヲ「八於座下聽湜繁經」ニ作ル



中華傳心地禪門一師資承襲圖

章敬寺澄 德宗 禮敬

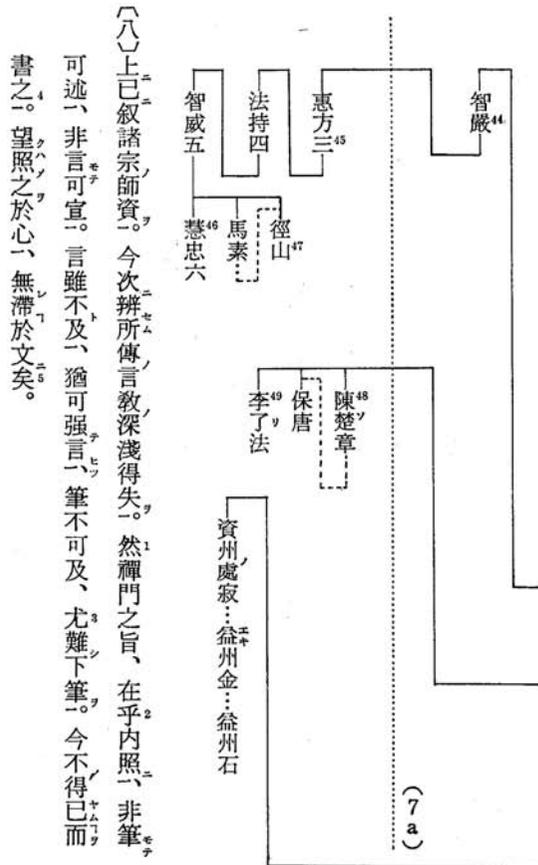
○此號每直下ニ子孫相承  
 〓此號每代□計兄弟之位。同一階者、於□□□



(6b)

「此號是親同學兄弟。由此號是傍正一宗之首。」  
 達磨一。○惠可二。○僧璨三。○道信四。○  
 尼物持  
 道育  
 達磨云、三人得我法、深淺不同。  
 尼物持如肉、斷煩惱、得菩提。  
 道育如骨、迷即煩惱、悟即菩提。  
 惠可如髓、本無煩惱、元是菩提。

- 17 (七)ノ上ニ「第一」アリ
- 18 (光宅忠)ノ代宗師也
- 19 (暉)ノ「暉」ニ作ル
- 20 (業)ノ「業」ニ作ル
- 21 (澄)ノ「澄」ニ作ル
- 22 (海)ノ「海」ニ作ル
- 23 (業)ノ「業」ニ作ル
- 24 (覺)ノ上ニ「惠」アリ
- 25 (中)ノ「中」ニ作ル
- 26 (澄)ノ「澄」ニ作ル
- 27 (證)ノ「證」ニ作ル
- 28 (德宗禮敬)ノ「ナシ」
- 29 (凡)ノ「凡」ニ作ル
- 30 (底)ノ「底」ニ作ル
- 31 (惠能)ノ「惠能」ニ作ル
- 32 (達)ノ「達」ニ作ル
- 33 (如)ノ「如」ニ作ル
- 34 (僧)ノ「僧」ニ作ル
- 35 (花)ノ「花」ニ作ル
- 36 (牛)ノ「牛」ニ作ル



〔八〕上已叙諸宗師資。今次辨所傳言教深淺得失。然禪門之旨、在乎內照、非筆可述、非言可宣。言雖不及、猶可強言、筆不可及、尤難下筆。今不得已而書之。望照之於心、無滯於文矣。

〔九〕然達磨西來、唯傳心法。故自云、我法以心傳心、不(7b)立文字。此心是一切衆生清淨本覺。亦名佛性、或云靈覺。迷起一切煩惱、煩惱亦不離此心、悟起無邊妙用、妙用亦不離此心。妙用煩惱、功過雖殊、在悟在迷、此心不異。欲求佛道、復須悟此心。故歷代祖宗、唯傳此也。然若感應相契、

37 (一) ハソノ他ノ兄弟弟子トシテ「黃梅朗禪師・舒州法藏・法淨」ノ三人アリ  
 38 (底) ハ「宗」ヲ「州」ニ作ルモ、(一)ニヨリ改ム  
 39 (一) ハソノ他ノ兄弟弟子トシテ「襄州通・潯州法如・果閻宣什・業州法・江州寧持・揚州覺」ノ六人アリ  
 40 (一) ハ「幹」ナシ  
 41 (底) ハ「資州處寂」ノ下ニ「益州金」アリ、コノ「金和尚」ハ衍字カ。(一)ハ「金和尚」ナシ  
 42 (底) ハ「宗淨」ナシ  
 43 (一) ハ「嚴」ヲ「巖」ニ作り、ソノ下ニ「第二」アリ  
 44 (一) ハ「三」ノ上ニ「第」アリ。以下「五」マデ同ジ。  
 45 (一) ハ「慧忠六」ヲ「惠忠」ニ作ル  
 46 (一) ハ「山」ノ下ニ「道欽」アリ  
 47 (底) ハ「陳」ヲ「際」ニ作ルモ、(一)ニヨリ改ム  
 48 (底) ハ「李了法」ヲ「李了」トシ、保唐ト別人トスルガ、保唐ト同人カ。  
 49 (一) ハ「保唐李了法」ニ作ル  
 1 (法) ハ「禪」以下四九字アリ、(法)ハ「然」ヲ「錄曰」ニ作ル  
 2 (底) ニ「乎」ナキモ、(一) (法) ニヨリ補ウ  
 3 (一) ハ「尤」ヲ「直」ニ作ル  
 4 (一) ハ「之」ナシ  
 5 (法) ハ「矣」ノ後ハ「(一四)ノ「荷澤意者云云」ト統ク  
 1 (法) ハ「然」以下「〔九〕」ナシ

則雖一燈傳百千燈、而燈無殊、若機教不投、雖一音演說法、而各各隨解。故諸宗異說、過在後人。今且略叙諸宗、後始判其差當。

(一〇)北宗意者、衆生本有覺性、如鏡(8a)有明性、煩惱覆之不現、如鏡有

塵闇一若依師言教、息滅妄念、念盡則心性覺悟、無所不知、如磨拂昏塵、

塵盡則鏡體明淨、無所不照。故彼宗主神秀大師、呈五祖偈云、

身是菩提樹、心如明鏡臺。

時時勤拂拭、莫遣有塵埃。

評曰、此但是染淨緣起之相、反流背習之門。而不覺妄念本無、心性本淨。

悟既未徹、修豈稱真。△劔南復有淨衆宗、旨與此大同。復有保唐宗、所解

似同、所修全異。不可繁叙、他日奉一一辨之。▽(8b)

(一一)△洪州意者、起心動念、彈指動目、所作所爲、皆是佛性全體之用。更無別

用、全體貪嗔癡、造善造惡、受苦受樂、皆是佛性。如麪作種種飲食、一

一皆麪一意以推求此身、四大骨肉、喉舌牙齒、眼耳手足、並不能自語言見

聞動作、假如一念命終、全身都未變壞、即便口不能語、眼不能見、耳不

能聞、脚不能行、手不能作。故知能語言動作者、必是佛性。且四大骨肉、

2 (一〇)ハ「復」ナシ

3 (一〇)ハ「燈」ノ下ニ「燈」アリ

4 (一〇)ハ「投」ノ下ニ「則」アリ

5 (一〇)ハ「略」ノ下ニ「所」アリ

6 (一〇)ハ「後」ヲ「各」ニ作ル

7 (一〇)ハ「後」ヲ「然」ニ作ル

1 (法)ハ「北」以下六一字アリ

2 (底)ハ「云」ニナルモ、(一〇)法ニヨ

リ改ム

3 (一〇)ハ「現」ヲ「見」ニ作ル

4 (底)ハ「師」ナシ

5 (底)ハ「言」ナキモ、(一〇)法ニヨリ

補ウ

6 (法)ハ「故」以下三三字ナシ

7 (一〇)ハ「勤」ヲ「須」ニ作ル

8 (法)ハ「評」以下三六字アリ

9 (法)ハ「是」ナシ

10 (一〇)ハ「無」ヲ「空」ニ作ル

11 (法)ハ「真」ノ下ニ「哉」アリ

12 (法)ハ「劔」以下割注ナシ

13 (一〇)ハ「日」ノ下ニ「面」アリ

1 (法)ハ「洪」以下(一一)ノ五〇一字

アリ

2 (底)ハ「貪」ナキモ、(一〇)法ニヨリ

補ウ

3 (一〇)ハ「苦」ヲ「樂」ニ作ル

4 (一〇)ハ「樂」ヲ「苦」ニ作リ、下ニ

「此」アリ

5 (一〇)ハ「假」ナシ

6 (一〇)ハ「語言」ヲ「言語」ニ作ル

一細推、都不解貪。故貪嗔煩惱、並是(9a)佛性。佛性體非一切差別種種、而能造作一切差別種種。體非種種者、謂此性非聖非凡、非因非果、非善非惡、無色無相、無根無住、乃至無佛無衆生也。能作種種者、謂此性即體之用。故能凡能聖、能因能果、能善能惡、現色現相、能佛能衆生、乃至能貪嗔等。若覈其體性、則畢竟不可見、不可證、如眼不見眼一等。若就其應用、即舉動運爲、一切皆是佛性。更無別法而爲能證所證。彼意准楞伽經云、如來藏是(9b)善不善因、能遍興造一切趣生、受苦樂與因俱。又云、佛語心爲宗、無門爲法門。又云、或有佛二利、揚眉二動目、笑吹、擊欸、或動搖等、皆是佛事。既解悟之理、一切天真自然。故所修行、理宜順此、而乃不起心、斷惡修善、亦不起心修道。道即是心、不可將心、還修於心。惡亦是心、不可將心、還斷於心。不斷不修、任運自在、名爲解脫人。無法可拘、無佛可作。猶如虛空、不增不減、何假添補。何(10a)以故。心性之外、無一法可得。故但任心即爲修也。

評曰、此與前宗、敵體相反。前則朝暮分別動作、一切是妄。此則朝暮分別動作、一切是真。奉問疑其、互相詆訛、莫肯會同。且所見如此相違、爭不

7 (正)ハ「嗔」ノ下ニ「煩惱」アリ、  
 (法)ハ「痴」アリ  
 8 (正)ハ「故」ノ下ニ「知」アリ  
 9 (正)ハ「別」ヲ「引」ニ作り、頭注ニ「引疑別」トアリ  
 10 (底)ハ「而」以下一四字欠クモ、(正) (法)ニヨリ補ウ  
 11 (正)ハ「此」ノ下ニ「佛」アリ  
 12 (法)ハ「聖」ヲ「凡」ニ作ル  
 13 (法)ハ「聖」ヲ「聖」ニ作ル  
 14 (正)ハ「果」ヲ「根」ニ作ル  
 15 (法)ハ「嗔」ノ下ニ「痴」アリ  
 16 (法)ハ「眼」ナシ  
 17 (法)ハ「即」ヲ「則」ニ作ル  
 18 (正)ハ「佛性」ナシ  
 19 (正)ハ「云」ナシ  
 20 (正)ハ「爲」以下七字ナシ  
 21 (法)ハ「無」以下五字ナシ  
 22 (正)ハ「又」ヲ「睛」ニ作ル  
 23 (正)ハ「目」ヲ「睛」ニ作ル  
 24 (法)ハ「吹」ヲ「欠」ニ作ル  
 25 (正) (法)ハ「解悟」ヲ「悟解」ニ作ル  
 26 (正)ハ「修善」ナシ  
 27 (正)ハ「造」ニ作ル  
 28 (正)ハ「外」ノ下ニ「更」アリ  
 29 (底)ハ「故」ナキモ、(正) (法)ニヨリ補ウ  
 30 (正)ハ「反」ヲ「返」ニ作ル  
 31 (正)ハ「是」ヲ「皆」ニ作ル  
 32 (正)ハ「是」ヲ「皆」ニ作ル  
 33 (法)ハ「奉」以下三字ナシ  
 34 (正)ハ「暮」ヲ「暮」ニ作り、頭注ニ「暮疑莫」トアル

誑訛。若存他<sup>レ</sup>則失<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>、爭肯會<sup>レ</sup>同。

〔三〕牛頭宗意者、謂、諸法如夢、本來無事、心境本寂、非今始空。迷之謂有、

即見榮枯貴賤等事。事既有相違相順。故生愛惡等情、情生則諸苦所繫。夢

(10b) 作夢受、何損何益。此能了之智、亦是夢心。乃至設有一法、過

於涅槃、亦如夢幻。既達本來無事、理宜喪己忘情。情忘則絕苦、因

方度一切苦厄。此以忘情、爲修行也。

評曰、前以念念全真、爲悟、任心爲修。此以本來無事爲悟、忘情爲修。

〔三〕又上三家見解異者、初一切皆妄、△北宗。▽次一切皆真、△洪州。▽後一

切皆無。△牛頭。▽若就行說者、初伏心滅妄、△北宗。▽次信任情性、

△洪州。▽後休心不起。△牛頭。▽且△宗密▽性好勸會、一一曾參、各

搜得旨趣如是。若將此語、問彼學人、(11a) 即皆且不招承、問有一答

空、徵空指有、或言是非、或言皆不可得。修不修等皆類此也。彼意者、

常恐墮於文字、常怕滯於所得、故隨言拂也。有歸心一師學、方委細教授、

令多時觀照、熟其所解矣。然每宗復有多種方便、拒於來外難、誘於徒屬、

1 (法)ハ「牛」以下二九五字アリ  
2 (正)ハ「謂」ヲ「體」ニ作ル、(法)ハ

3 (正)ハ「謂」ヲ「爲」ニ作ル  
4 (正)ハ「事」ノ下ニ「跡」アリ

5 (正)ハ「此」ノ上ニ「有」アリ  
6 (正)ハ「是」ヲ「如」ニ作ル

7 (正)ハ「夢」ノ下ニ「如」アリ  
8 (底)ハ「情」ナキモ、(正)(法)ニヨリ

9 (正)ハ「忘則」ヲ「妄即」ニ作り、頭  
注ニ「妄疑忘次同」トアル

10 (底)ハ「行」ナシ  
11 (底)ハ「全」ナキモ、(正)(法)ニヨリ

12 (正)ハ「來」ナシ  
補ウ

1 (底)ハ「忘」ニ作ルモ、(正)(法)ニ  
ヨリ改ム

2 (正)ハ「北宗」ナシ  
3 (正)ハ「洪州」ナシ

4 (正)ハ「牛頭」ナシ  
5 (底)ハ「若」以下二六字ナキモ、(正)

(法)ニヨリ補ウ  
6 (正)ハ「北宗」ナシ

7 (正)ハ「洪州」ナシ  
8 (正)ハ「牛頭」ナシ

9 (正)ハ「且」ナシ  
10 (正)ハ「且」ナシ

11 (正)ハ「指」ヲ「認」ニ作ル  
12 (正)ハ「是」ヲ「俱」ニ作ル

不可具書。今但羅其意趣、舉其宏綱也。

〔四〕荷澤宗者、尤難言述。是釋迦降出、達磨遠來之本意也。將前望此、乃迥異於前、將此攝前、前即(11b)全同此、故難言也。然言之甚易。所以難者、知音稀也。今強言之、謂、諸法如夢、諸聖同說。故妄念本寂、塵境本空。空寂之心、靈知不昧。即此空寂之知、是前達磨所傳、清淨心也。任迷任悟、心本自知、不藉緣生上、不因境起。迷時煩惱、知非煩惱、悟時神變、知非神變。然知之一字、衆妙之源。由迷此知、即起我相、計我所、愛惡自生。隨愛惡情、即爲善惡、善惡之報、受六道形、世世生生、循環不絕。若得善友開示(12a)、頓悟空寂之知。寂知且無念無形、誰爲我相人相。覺諸相空、心自無念。念起即覺、覺之即無。修行妙門、唯在此也。故雖備修萬行、唯以無念爲宗。但得無念、則愛惡自然淡薄、悲智自然增明、罪業自然斷除、功行自然精進。於解、即見諸相非相、於行、則名無修之修。煩惱盡時、生死即絕、生滅滅已、寂照現前、應用無窮、名之爲佛。

13 (一)ハ「師」ナシ  
14 (一)ハ「學」ノ下ニ「者」アリ  
15 (一)ハ「法」ハ「所」ヲ「行」ニ作ル  
16 (一)ハ「然」以下三三字ナシ  
17 (一)ハ「來」ナシ

1 (法)ハ「荷」以下二五八字アリ、但シ  
2 (法)ハ「宗」ヲ「意」ニ作ル  
3 (法)ハ「尤」以下五二字ナシ  
4 (一)ハ「乃」ノ上ニ「此」アリ  
5 (一)ハ「同」ノ下ニ「於」アリ  
6 (一)ハ「然」以下一三字ナシ  
7 (底)ハ「諸」ナキモ、(七)法ニヨリ  
補ウ  
8 (一)ハ「之」ヲ「寂」ニ作ル  
9 (法)ハ「知」ヲ「心」ニ作ル  
10 (法)ハ「磨」ヲ「摩」ニ作ル  
11 (一)ハ「清淨」ヲ「空寂」ニ作ル  
12 (一)ハ「知」ノ上ニ「亦」アリ、頭注  
13 (一)ハ「變」ノ下ニ「亦知」アリ  
14 (一)ハ「一」ヲ欠クモ、(出)法ニヨ  
15 (法)ハ「字」ノ下ニ「是」アリ  
16 (底)ハ「受」ニナルモ、(七)法ニヨ  
17 (一)ハ「情」ヲ「心」ニ作ル  
18 (一)ハ「寂」ナシ  
19 (底)ハ「無念」ナキモ、(七)法ニヨ  
20 (一)ハ「心」ノ上ニ「眞」アリ  
21 (一)ハ「自」ナシ

〔二五〕上<sup>1</sup>已<sup>2</sup>各叙<sup>3</sup>一宗<sup>4</sup>、今辨明深淺得失<sup>5</sup>。然心貫萬<sup>6</sup>(12 b)法、義味無邊、諸教開張<sup>7</sup>、禪宗撮略<sup>8</sup>。撮略者、就法<sup>9</sup>有不變隨緣<sup>10</sup>、二義<sup>11</sup>、就人<sup>12</sup>有頓悟漸修<sup>13</sup>、兩門。二義顯<sup>14</sup>、卽知一藏經論之指歸<sup>15</sup>、兩門開<sup>16</sup>、卽見一切賢聖之軌轍<sup>17</sup>。達磨深旨<sup>18</sup>、意在斯<sup>19</sup>焉。不變隨緣者、然象外之理<sup>20</sup>、直說難證<sup>21</sup>。今以喻<sup>22</sup>爲衡鏡<sup>23</sup>、定語宗之是非<sup>24</sup>。△注便隨喻<sup>25</sup>以法合之<sup>26</sup>、隨文以注<sup>27</sup>對之<sup>28</sup>。冀法喻<sup>29</sup>一相照<sup>30</sup>、易見覺<sup>31</sup>也。然初覺時<sup>32</sup>、但一向讀<sup>33</sup>、辨本末<sup>34</sup>了<sup>35</sup>、然後却以注文<sup>36</sup>、對詳其理<sup>37</sup>也。▽

△〔二六〕如摩尼珠<sup>1</sup>、△一靈心也<sup>2</sup>。▽唯圓淨明<sup>3</sup>、△空寂知也<sup>4</sup>。▽都無一切差別色相<sup>5</sup>。△此知本無一切分別<sup>6</sup>、亦無一切善惡也<sup>7</sup>。▽以體明故<sup>8</sup>、對(13 a)外物<sup>9</sup>時、能現一切差別色相<sup>10</sup>。△以體知<sup>11</sup>故、對諸緣<sup>12</sup>時、能分別一切是非好惡<sup>13</sup>、乃至經營造作<sup>14</sup>、世間出世間種種事數<sup>15</sup>。此是隨緣義也<sup>16</sup>。▽色相自有差別<sup>17</sup>、明珠不曾變易<sup>18</sup>。△愚智善惡<sup>19</sup>、自有差別<sup>20</sup>、憂喜愛憎<sup>21</sup>、自有起滅<sup>22</sup>、能知之心<sup>23</sup>、不曾間斷<sup>24</sup>。此是

22 (七)ハ「念」ノ下ニ「之心」アリ  
23 (七)ハ「精」ヲ「増」作ル  
24 (七)ハ「法」ハ「即」ヲ「則」ニ作ル

1 (法)ハ「上」以下最後「(二二)」マデ異字アルモ、全項目ノ文アリ

2 (法)ハ「顯」ヲ「現」ニ作ル  
3 (法)ハ「指」ヲ「旨」ニ作ル

4 (法)ハ「即」ヲ「則」ニ作ル  
5 (法)ハ「磨」ヲ「摩」ニ作ル

6 (法)ハ「意」ノ下ニ「實」アリ  
7 (法)ハ「不」ノ上ニ「初法有」アリ

8 (法)ハ「是」ヲ「得」ニ作ル  
9 (法)ハ「注」ナシ。(法)ハ「注」以下

10 (法)ハ「注」ナシ。(法)ハ「注」以下二五字ヲ「辨自心之眞妄」ニ作ル

11 (法)ハ「覽」ナシ  
12 (法)ハ「但」ノ下ニ「請且」アリ、

13 (法)ハ「但」ノ下ニ「且」アリ  
14 (法)ハ「却」ノ下ニ「喻」アリ

15 (法)ハ「詳」ヲ「再」ニ作ル  
16 (法)ハ「也」ナシ

1 (法)ハ「摩」ノ上ニ「一」アリ  
2 (法)ハ「也」ヲ「性」ニ作ル

3 (法)ハ「空寂知也」ヲ「空寂常知」ニ作ル

4 (法)ハ上ノ二注ト合シテ割注トセズ、

5 (法)ハ「一切」ヲ「聖凡」ニ作ル  
6 (法)ハ「間」ナシ

7 (法)ハ「愛憎」ヲ「憎愛」ニ作ル

〔二七〕復有一類人、指示云、即此黑闇便是明珠、明珠之體、永不可見。欲得識

不變易義也。√然珠所現二色、雖百千般、今且取與明珠二相違之黑色、以況  
 靈明知見與黑闇無明。雖相違、而是一體。△法喻已具。√謂如珠二現黑色  
 時、徹體一全黑、都不見明。△靈知之心、在凡夫一時、全是迷愚貪愛、都不  
 覺如來知見大圓鏡智。故經云、身心等相、皆是無明也。√癡孩子、或村野  
 人見之、直是黑珠。△迷人但見妄是凡夫。上都喻六道衆生、已(13 b)  
 下喻諸教之人也。√有人語云、此是明珠、灼然不信、却噴前人、謂言欺  
 誑、任說種種道理、終不聽覽。△宗密頻遇如此之類、向道汝今聲聞能  
 知現是佛心、灼然不信、却云是誘三婆三大之言、直不肯照察、但言某甲  
 鈍根、實不能入。此是大小乘、法相及人天教中、着相之人意所見。如此  
 也。√縱有下肯信說、是明珠者上、緣自都其黑、亦謂被黑色纏裹覆障、  
 擬下待磨拭揩洗、去却黑闇、方得出明相。現、始名中親見中明珠。△北宗見  
 解一如此。√

1 (二七)ハ「闇」ヲ「暗」ニ作ル  
 36 (法)ハ「此」ノ下ニ「也」アリ  
 35 (法)ハ「現」ノ上ニ「出」アリ  
 34 (法)ハ「出」ナシ  
 33 (法)ハ「闇」ニ作ル  
 32 (法)ハ「謂」ノ下ニ「言」アリ  
 31 (法)ハ「都」ヲ「親」ニ作ル  
 30 (法)ハ「說」ナシ、(法)ハ「說」ノ上ニ「所」アリ  
 29 (法)ハ「說」ナシ  
 28 (法)ハ「所」ナシ  
 27 (法)ハ「甲」ヲ「乙」ニ作ル  
 26 (法)ハ「云」ノ下ニ「此」アリ  
 25 (法)ハ「三」ヲ「二」ニ作ル  
 24 (法)ハ「却」以下一〇字ナシ  
 23 (法)ハ「現」ヲ「見」ニ作ル  
 22 (法)ハ「聲聞」ヲ「了」ニ作ル  
 21 (法)ハ「言」ヲ「爲」ニ作ル  
 20 (法)ハ「已」以下八字ナシ  
 19 (法)ハ「生」ノ下ニ「也」アリ  
 18 (法)ハ「上」以下一五字ナシ  
 17 (法)ハ「妄」ヲ「定」ニ作ル  
 16 (法)ハ「迷」ノ上ニ「故」アリ  
 15 (法)ハ「癡」ノ上ニ「如」アリ  
 14 (法)ハ「覺」ヲ「見」ニ作ル  
 13 (法)ハ「都」以下三字ナシ  
 12 (法)ハ「迷愚」ヲ「愚迷」ニ作ル  
 11 (法)ハ「雖」ノ下ニ「即」アリ  
 10 (法)ハ「闇」ヲ「暗」ニ作ル  
 9 (法)ハ「違」ノ下ニ「者」アリ  
 8 (法)ハ「易」ナシ

(14 a) 者、卽黑<sup>レ</sup>便是<sup>ニ</sup>、〔乃至卽種種青黃<sup>ニ</sup>皆是<sup>ニ</sup>。致令愚<sup>ニ</sup>者的信此言<sup>ニ</sup>〕專記黑相<sup>一</sup>、或認種種相<sup>ニ</sup>爲明珠<sup>一</sup>、或於異時<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>黑檀子<sup>一</sup>・朱唄<sup>一</sup>・青珠<sup>一</sup>、乃至赤琥珀<sup>一</sup>・白石瑛等珠<sup>一</sup>、皆云是摩尼珠<sup>一</sup>。或於異時、見<sup>レ</sup>摩尼珠都不對色<sup>ニ</sup>時、但有明淨之相<sup>一</sup>、却不認<sup>レ</sup>之、以不見<sup>レ</sup>〔有<sup>一</sup>〕諸色識<sup>一</sup>認<sup>レ</sup>〔故、疑<sup>ニ</sup>〕恐局<sup>一</sup>。一<sup>レ</sup>明相<sup>一</sup>故。〔洪州見解如此<sup>ニ</sup>也。言愚者<sup>一</sup>、彼宗後學也。異時乃至見黑檀子等<sup>一</sup>者、心涉世間<sup>一</sup>、分別塵境<sup>ニ</sup>時、見貪愛嗔慢<sup>ニ</sup>之念<sup>一</sup>也。琥珀・白石瑛等者、如慈善謙敬之念<sup>一</sup>也。不對色<sup>ニ</sup>時者、無所念<sup>ニ</sup>也。但有明淨<sup>一</sup>者、了了自知無念<sup>一</sup>也。疑局者、彼彼唯認知<sup>ニ</sup>是偏局也。〕

〔一〕復有一類人<sup>一</sup>、聞說此種種色<sup>一</sup>、皆是虛妄、徹體全空<sup>一</sup>、卽計此一顆珠<sup>一</sup>、都是其空<sup>一</sup>、便云<sup>レ</sup>都不執<sup>一</sup>〔14 b〕定<sup>一</sup>、方是達人、認有一法<sup>一</sup>、便是未了<sup>一</sup>、不悟<sup>一</sup>色相皆空之處<sup>一</sup>、乃是不空明瑩之珠<sup>一</sup>。〔牛頭見解如此<sup>ニ</sup>也。聞說空者<sup>一</sup>、諸部般若

- 2 (一)ハ「是」ノ下ニ「明珠」アリ  
 3 (一)ハ「種種」ヲ「青黃」ノ下ニ作ル  
 4 (一)ハ「爲」ノ上ニ「以」アリ  
 5 (一)ハ「子」ノ下ニ「珠」アリ  
 6 (一)ハ「法」ハ「朱唄」ヲ「米吹」ニ作ル  
 7 (一)ハ「珠」ノ下ニ「碧珠」アリ  
 8 (一)ハ「赤」ノ下ニ「珠」アリ  
 9 (一)ハ「英」ヲ「英」ニ作ル  
 10 (一)ハ「見」ヲ「是」ニ作リ、頭注ニ「是一作見」トアル  
 11 (一)ハ「法」ハ「識」ノ上ニ「可」アリ  
 12 (一)ハ「局」ノ下ニ「於」アリ  
 13 (一)ハ「明」ノ下ニ「珠」アリ  
 14 (一)ハ「乃至」ナシ  
 15 (一)ハ「見」ナシ  
 16 (一)ハ「法」ハ「塵」ヲ「塵」ニ作ル  
 17 (一)ハ「愛嗔」ヲ「嗔愛」ニ作ル  
 18 (一)ハ「白」ナシ  
 19 (一)ハ「英」ヲ「英」ニ作ル  
 20 (一)ハ「等」ナシ  
 21 (一)ハ「底」ニ「也」ナキモ、(一)ハ「法」ニヨリ  
 22 (一)ハ「補ウ」  
 23 (一)ハ「彼」ヲ「之」ニ作リ、(一)ハ「彼」ヲ「云」ニ作ル  
 1 (一)ハ「此」ヲ「珠中」ニ作ル  
 2 (一)ハ「珠」ノ上ニ「明」アリ  
 3 (一)ハ「不執定」ヲ「無所得」ニ作ル  
 4 (一)ハ「聞」ナシ  
 5 (一)ハ「法」ハ「聞」以下一二字ヲ「聞般若經說空」ニ作ル  
 6 (一)ハ「空」ノ下ニ「等」アリ

説空經也。計此一類等者、計本覺性亦空無所有。認有等者、聞諸法空寂之處、了了能知、是本覺真心、却云不了不知、心體不空。不空者、涅槃經云如瓶空者、謂瓶中無物、名為瓶空、非謂無瓶。即明真心之中、無分別貪嗔等念、名為心空、非謂無心、言無心者、但遣却心中煩惱也。故知、牛頭但遣其非、未顯其是。從此下、喻荷澤意也。▽

〔二〕何如 直云唯瑩淨圓明、方是珠體。△唯空寂知也。若但說空寂、而不顯知、即何異虛空。亦如圓瑩瑩淨之盜團、雖淨而無明性、名摩尼、何能現影。洪州・牛頭、說無、一切不顯靈知、亦如此。▽其黑色乃至一切青黃色等、(15 a) 悉是虛妄。△善惡分別、舉動運爲、如洪州所認、起心動念等、悉是虛妄。故金剛經云、凡所有相、皆是虛妄。當知彼宗認虛妄、爲眞性也。▽正見黑時、黑元不黑、但是其明。青元不青、但是其明。乃至赤白黃等一切皆然、但是其明。即於諸色相處、一但見瑩淨圓明、即於珠不惑。△一切皆空、唯心不變。迷時亦知、知元不迷、念起亦知、知元無念。

- 7 (己) 空ノ下ニ「之」アリ
- 8 (法) 計ノ下六字ナシ
- 9 (己) 所有ヲ「有所認」ニ作ル
- 10 (法) 認以下五字ナシ
- 11 (己) 聞ノ下ニ「說」アリ
- 12 (己) 能ナシ
- 13 (底) 不ナキモ、(己)ニヨリ補ウ
- 14 (己) 云ヲ「說」ニ作ル
- 15 (己) 即明眞ハ「言無者」ニ作リ(法)ハ「即」ヲ「今則」ニ作ル
- 16 (己) 心ナシ
- 17 (己) 但ノ下ニ「爲」アリ
- 18 (法) 却ナシ
- 19 (法) 顯ヲ「現」ニ作ル
- 20 (法) 從ナシ
- 21 (己) 喻ノ上ニ「皆」アリ
- 22 (己) 也ナシ
- 1 (法) 即ヲ「則」ニ作ル
- 2 (己) 淨ノ上ニ「圓」アリ
- 3 (己) 法ハ「名」ノ上ニ「何」アリ
- 4 (法) 現ヲ「顯」ニ作ル
- 5 (法) 洪以下一五字ナシ
- 6 (己) 說ノ上ニ「但」アリ
- 7 (己) 切ヲ「物」ニ作ル
- 8 (己) 此ノ下ニ「也」アリ
- 9 (法) 善以下四六字ナシ
- 10 (己) 悉是虛ヲ「即是一切相、此相皆」ニ作ル
- 11 (己) 金剛ナシ
- 12 (己) 黑ノ下ニ「色」アリ
- 13 (己) 即ノ上ニ「既」アリ
- 14 (法) 故以下一五字ナシ
- 15 (己) 比以下一五字ナシ

乃至哀樂喜怒愛惡、一一皆知。知元空寂、空寂而知。即於心性、了然不惑。此上皆迥異諸宗也。故初標云、將前望比、比即迥異於前也。▽但於珠不惑、則黑即無黑、黑即是珠。諸色皆爾。即是有無自在、明黑融通。復何礙哉。△此同彼二宗也。黑即無黑、同牛(15b)頭・洪州俱云一切皆無也。黑即是珠已下、同洪州云一切皆是佛性、凡聖善惡、皆無所礙。故初標又云、將此攝前、前即全同於此。自此已下喻意、再將荷澤本宗、簡三宗、▽

若不認得明是能現之體、永無變易、△反明荷澤認得一也。▽但云黑等是珠、△洪州。▽或擬離黑、覓珠、△北宗。▽或言明黑都無者、△牛頭。▽皆是未見珠也。△都結。▽

問、據諸大乘經、及古今諸宗禪門、乃至荷澤所說、理性皆同、云無生無滅、無爲無相、無凡無聖、無是非非、不可說不可證、今但依此即是、何必須說靈知一耶。答、此並是遮(16a)過之辭、未爲顯示心體。若不指示見今聲聞常知不斷不昧、是自心者、說何無爲無相等一耶。是知諸教只

16 (七)ハ「也」ナシ  
 17 (七)ハ「即」ヲ「既」ニ作リ、(法)ハ「即」ヲ「則」ニ作ル  
 18 (七)ハ「珠」ノ上ニ「明」アリ  
 19 (七)ハ「此」以下六字ナシ  
 20 (七)ハ「洪州俱」ヲ「牛頭但」ニ作ル  
 21 (七)ハ「洪」以下九字ナシ  
 22 (七)ハ「也」ナシ  
 23 (七)ハ「是」ナキモ、(七)(法)ニヨリ補ウ  
 24 (七)ハ「已下」ナシ  
 25 (七)ハ「云」ノ上ニ「洪州」アリ、(法)ハ「云」以下四五字ヲ「若親見明珠、深必該淺故也」ニ作ル  
 26 (七)ハ「又」ヲ「但」ニ作ル  
 27 (七)ハ「即」ノ下ニ「是」アリ  
 28 (七)ハ「簡」ヲ「結束」ニ作ル  
 29 (七)ハ「宗」ノ下ニ「也」アリ  
 30 (七)ハ「不」ナシ  
 31 (七)ハ「明」ノ下ニ「珠」アリ  
 32 (七)ハ「反」以下七字ヲ「荷澤」ニ作ル  
 33 (七)ハ「割」注ナシ、以下五ヶ所同ジ  
 34 (七)ハ「等」ナシ  
 35 (七)ハ「州」ノ下ニ「宗」アリ  
 36 (七)ハ「言」ナシ  
 37 (七)ハ「頭」ノ下ニ「宗」アリ  
 1 (七)ハ「諸」ナシ  
 2 (七)ハ「凡」ト「聖」ガ入レ替ル  
 3 (七)ハ「說」ト「證」ガ入レ替ル  
 4 (七)ハ「要」ナキモ、(七)(法)ニヨリ補ウ  
 5 (七)ハ「是」ノ上ニ「此」アルモ、(七)(法)ニヨト削ル  
 6 (七)ハ「過」ヲ「遺」ニ作ル

說此知無生無滅等<sup>13</sup>也。故荷澤於空無相處<sup>14</sup>、指示知見<sup>15</sup>、令<sup>16</sup>人認得便覺自心、  
 經生<sup>17</sup>越世<sup>18</sup>、永無<sup>19</sup>間斷<sup>20</sup>、乃至成佛<sup>21</sup>也。荷澤又收束無爲無住、乃至不可說等、  
 種種之言<sup>22</sup>、但云空寂知<sup>23</sup>、一切攝盡<sup>24</sup>。空者空却諸相<sup>25</sup>、猶是遮遣之言<sup>26</sup>。唯寂是  
 實性不變動<sup>27</sup>義<sup>28</sup>、不同空無<sup>29</sup>也。知是當體表顯<sup>30</sup>、(16b)義<sup>31</sup>、不同分別也<sup>32</sup>。唯  
 此方爲真心本體。故始自發心<sup>33</sup>、乃至成佛<sup>34</sup>、唯寂唯知<sup>35</sup>、不變不斷<sup>36</sup>。但隨地位<sup>37</sup>、  
 名義稍殊<sup>38</sup>。謂約了悟時<sup>39</sup>、名爲理智<sup>40</sup>、入理即是寂<sup>41</sup>、智即是知<sup>42</sup>。約發心修時<sup>43</sup>、  
 名爲止觀<sup>44</sup>、入止息塵緣<sup>45</sup>、契於寂<sup>46</sup>也。觀照性相<sup>47</sup>、冥於知<sup>48</sup>也。約任運成行<sup>49</sup>、  
 名爲定慧<sup>50</sup>、入因止緣<sup>51</sup>、而融心<sup>52</sup>定<sup>53</sup>。定者寂然不變<sup>54</sup>。因觀照功<sup>55</sup>、而發慧<sup>56</sup>。  
 慧者知無分別<sup>57</sup>。約煩惱都盡<sup>58</sup>、功行圓滿<sup>59</sup>、成佛之時<sup>60</sup>、名爲菩提涅槃<sup>61</sup>。入菩  
 提梵語<sup>62</sup>、此云覺<sup>63</sup>、即是知也。涅槃梵語<sup>64</sup>、此云寂滅<sup>65</sup>、即是寂也。當知一始<sup>66</sup>、  
 自發心<sup>67</sup>、乃至畢竟<sup>68</sup>、唯寂唯知<sup>69</sup>。若如二宗<sup>70</sup>、但云空寂<sup>71</sup>、無爲等<sup>72</sup>、(17a)義<sup>73</sup>、  
 而闕善提等義<sup>74</sup>。

7 (世)ハ「辭」ヲ「詞」ニ作り、(法)ハ「辭」ヲ「辭」ニ作ル  
 8 (法)ハ「顯」ヲ「現」ニ作ル  
 9 (世)ハ「見」ヲ「現」ニ作ル  
 10 (世)ハ「聲聞」ヲ「了了」ニ作ル  
 11 (世)ハ「不斷」ナシ  
 12 (底)ハ「何」ナキモ、(世)法)ニヨリ補ウ、(世)ハ「何」ノ下ニ「爲」アリ  
 13 (法)ハ「無」ナシ  
 14 (法)ハ「又」ヲ「荷澤」ノ上ニ作ル  
 15 (法)ハ「唯」ナシ  
 16 (法)ハ「現」ニ作ル  
 17 (法)ハ「顯」ヲ「現」ニ作ル  
 18 此不録焉ノ割注アリ、ヨリテ相當箇所ヲ『定慧結社文』ト校合ス  
 19 (世)ハ「是寂」ヲ「寂也」ニ作ル  
 20 (世)ハ「是知」ヲ「知也」ニ作ル  
 21 (世)ハ「修」ノ下ニ「行」アリ  
 22 (世)ハ「名」ヲ「多」ニ作ル  
 23 (世)ハ「功」ナシ  
 24 (世)ハ「融」ナシ  
 25 (底)ハ「而」ナキモ、(世)定慧結社文)ニヨリ補ウ  
 26 (世)ハ「別」ノ下ニ「也」アリ  
 27 (世)ハ「云」ヲ「翻爲」ニ作ル  
 28 (世)ハ「云」ヲ「翻爲」ニ作ル  
 29 (世)ハ「竟」ヲ「意」ニ作り、頭注ニ「意疑竟」トアル  
 30 (世)ハ「知」ノ下ニ「也」アリ。『定慧結社文』ハ「知」ノ下ニ「今言唯寂唯知、正是惺惺寂寂也」ノ割注アリ  
 31 『定慧結社文』ハ「若」以下一八字ナ

(三)問、洪州又云靈覺及鑒照等、何異於知。答、若據多義、以顯一體、即萬法皆是一心。何以覺鑒等。今就尅體指示、即愚智善惡、乃至禽畜等心性、皆自然聲聞常知、異於木石。其覺智等言、即不通一切。謂迷者不覺、愚者無智。一心無記時、不名鑒照等。豈同心體自然常知。故華嚴疏主答順宗(所カ)問、心要云、無住心體、(17b)靈知不昧。又云、任運寂知。又云、雙照寂知。華嚴經亦揀知與智別。況洪州雖云靈覺、但是標衆生有之。如云三皆有佛性之言、非的指示。指示則但云能語言等。若細詰之、即云一切假名、無有定法。且統論教、有遺顯二門、推其實義、有真空妙有、究其本心、具體具用。今洪州牛頭、以拂迹爲至極。但得遺教之意、真空之義、雖成其體、失於顯教之意、妙有之義、闕其用也。問、洪(18a)州以能語言動作等、顯於心性、即當顯教、即是其用、何所闕耶。答、真心本體、有二種用。一者自性本用、二者隨緣應用。猶如銅鏡、銅之質是自性體、銅之明是自性用。明所現影、是隨緣用。影即對緣、方現之、現有

- 34 (七)ハ「等義」ヲ「義也」ニ作ル
- 33 (七)ハ「義而」ヲ「者則」ニ作ル
- 32 (七)ハ「云」ヲ「言」ニ作ル
- 1 (七)ハ「又」ヲ「亦」ニ作ル
- 2 (七)ハ「以」ヲ「唯」ニ作ル
- 3 (七)ハ「上」ヲ「靈」アリ
- 4 (七)ハ「下」ヲ「照」アリ
- 5 (七)ハ「即」ヲ「則」ニ作ル
- 6 (七)ハ「等」ヲ「ナシ」
- 7 (七)ハ「自」ヲ「ナシ」
- 8 (七)ハ「聲聞」ヲ「了了」ニ作ル
- 9 (七)ハ「不」ヲ「上」ニ作ル
- 10 (七)ハ「華」ヲ「花」ニ作ル
- 11 (七)ハ「答」以下七字ヲ「心要錢」ニ作ル
- 12 (七)ハ「宗」ノ下ノ字ヨリ四字ナシ
- 13 (七)ハ「又」以下二字ナシ
- 14 (七)ハ「指示」ナキモ、(七)ハ「法」ニヨリ補ウ
- 15 (七)ハ「云」ナキモ、(七)ハ「法」ニヨリ補ウ
- 16 (七)ハ「教」ノ上ニ「佛」アリ
- 17 (七)ハ「究」ヲ「空」ニ作ル
- 18 (七)ハ「迹」ヲ「跡」ニ作ル
- 19 (七)ハ「唯」ニ作ル
- 20 (七)ハ「作」ナキモ、(七)ハ「法」ニヨリ補ウ
- 21 (七)ハ「心」ナキモ、(七)ハ「法」ニヨリ補ウ
- 22 (底)ハ「影」ナキモ、(七)ハ「法」ニヨリ補ウ

千差、明即常明。明唯一味。以喻心常寂是自性體、心常知是自性用、此知能語言能分別動作等、是隨緣應用。今洪州指示能語言等、但隨緣用、闕自性用也。又顯(18b)教有比量顯、現量顯。洪州云心不可指、以能語言等三驗之、知有佛性、是比量顯也。荷澤直云心體能知、知即是心、約知以顯心、是現量顯也。洪州闕此。上已述不變隨緣二義。

△今次明頓悟、漸修兩門一者。然真如之理、尙無佛無衆生。況有師資傳授。今既自佛已來、祖代傳授。即知約人修證趣入之門也。既就人論、即有迷悟凡聖。從迷而悟即頓、轉凡成聖即漸。(19a)頓悟者、謂無始迷倒、認此四大爲身、妄想爲心、通認爲我、若遇善友、爲說如上不變隨緣、性相體用之義、忽悟靈明知見、是自真心、心本恒寂、無邊無相、即是法身、身心不二、是爲真我、即與諸佛、分毫不殊、故云頓也。如三有大官、夢在牢獄、身著枷鎖、種種憂苦、百計求出、遇二人喚起、忽然覺悟、方見

- 23 (七) (法) (ハ) (之) ナシ  
 24 (底) (ニ) (現) ナキモ、(七) (法) ニヨリ  
 補ウ  
 25 (七) (ハ) (常) ノ上ニ「自性」アリ  
 26 (七) (ハ) (知) ナシ  
 27 (法) (ハ) (動作) ナシ  
 28 (法) (ハ) (應) ナシ  
 29 (底) (ハ) (但) ノ下ニ「是」アリ  
 30 (底) (ハ) (也) ナキモ、(七) (法) ニヨリ  
 補ウ  
 31 (底) (ハ) (現) ヲ「見」ニ作ル  
 32 (七) (ハ) (心) ノ下ニ「體」アリ  
 33 (七) (法) (ハ) (指) ノ下ニ「示」アリ  
 34 (七) (ハ) (以) ノ上ニ「但」アリ  
 35 (法) (ハ) (約) ノ上ニ「此」アリ  
 36 (底) (ハ) (現) ヲ「見」ニ作ル  
 37 (法) (ハ) (洪) 以下三字ナシ  
 38 (七) (ハ) (上) ヲ「已上」ニ作ル  
 1 (法) (ハ) (今) ナシ  
 2 (七) (ハ) (代) ヲ「祖」ニ作ル  
 3 (法) (ハ) (修) ノ上ニ「有」アリ  
 4 (七) (ハ) (入) ヲ「人」ニ作ル  
 5 (法) (ハ) (即) ヲ「則」ニ作ル  
 6 (七) (ハ) (悟) ノ下ニ「始終」アリ  
 7 (七) (ハ) (漸) ヲ「頓悟」ニ作ル  
 8 (七) (ハ) (明) ヲ「靈」ニ作ル  
 9 (七) (ハ) (恒) ヲ「空」ニ作ル  
 10 (七) (ハ) (也) ノ下ニ「此下舉喻、便隨  
 文注、以法合之」ノ割注アリ  
 11 (法) (ハ) (鎖) ヲ「鎖」ニ作ル  
 12 (底) (ハ) (籠) ヲニ作ルモ、(七) (法) ニ  
 ヲリ改ム

自身、元在自家、安樂富貴、與諸朝寮、都無別異也。言大官者、喻佛(19 b)性也。夢者、迷也。牢獄者、三界也。身者、阿賴耶識也。枷鎖者、貪愛也。種種憂苦者、受報也。百計求出者、問法勤修也。遇人喚起者、善知識也。忽然覺悟者、聞法一心開也。方見自身者、喻法身真我也。元在自家者、經云畢竟空寂舍也。安樂者、寂滅爲樂也。富貴者、體上本有河沙功德妙用也。與諸朝寮無異者、同諸佛之眞性也。據此法喻、一一分明、足辨夢悟(20 a)身心本源雖一、論其相用、倒正懸殊。不可覺來還作夢事、官以喻心源雖一、迷悟懸殊。夢時拜相、迷時修得、大梵天等位。不及覺時作尉。悟後初入十信位也。夢時七寶、迷時修無量功德也。不及覺時百錢。悟時持五戒十善也。皆以一妄一眞、故不可類。諸教皆云、施七寶三千界、不如聞一句偈。是此意也。今洪州但言貪嗔戒定一種是佛性作用者、闕於揀辨迷悟倒正之用也。彼意在眞如心性無愚一故、不中揀擇、及就眞性、即本無言(20 b)說、誰道異同。今既有師資相傳、即須揀辨倒正。

次明漸修者、雖頓悟法身眞心全同、諸佛、而多劫妄執四大爲我、習已成性、難卒頓除、故須依悟漸修、損之又損、乃至無損、即名成佛。非此

13 (法)ハ「寮」ヲ「僚」ニ作ル  
 14 (七)ハ「也」ナク、「法合一一如注可  
 知」ノ割注アリ  
 15 (七)ハ「言」以下一二七字ヲ前文ノ相  
 當箇所ノ割注トス  
 16 (七)ハ「也」ナシ、以下指摘ヲ略ス  
 17 (法)ハ「阿」ノ上ニ「喻」アリ、(七)  
 ハ「阿賴耶」ヲ「本」ニ作ル  
 18 (法)ハ「鑊」ヲ「鎖」ニ作ル  
 19 (七)ハ「受」ヲ「一切業」ニ作ル  
 20 (底)ハ「聞」ニ作ルモ、(七)(法)ニヨ  
 リ改ム  
 21 (底)ハ「窟」ニ作ルモ、(七)(法)ニヨ  
 リ改ム  
 22 (七)ハ「經」ノ上ニ「淨名」アリ  
 23 (底)ハ「空」ナキモ、(七)(法)ニヨリ  
 補ウ  
 24 (法)ハ「妙用」ナシ  
 25 (法)ハ「寮」ヲ「僚」ニ作ル  
 26 (底)ハ「悟」ヲ「窟」ニ作リ、(法)ハ  
 「悟」ヲ「窟」ニ作ル  
 27 (底)ハ「眞」ニ作ルモ、(七)(法)ニヨ  
 リ改ム  
 28 (七)ハ「官」ナシ  
 29 (底)ハ「辨」ニ作ルモ、(七)(法)ニヨ  
 リ改ム  
 30 (底)ハ「入」ニ作ルモ、(七)(法)ニヨ  
 リ改ム  
 31 (七)ハ「天」ノ下ニ「王」アリ  
 32 (法)ハ「位」ノ下ニ「也」アリ  
 33 (七)ハ「時」ヲ「得」ニ作ル  
 34 (七)ハ「時」ヲ「得」ニ作ル  
 35 (七)ハ「也」ナシ

心外有佛可成<sup>36</sup>也。然雖漸修<sup>37</sup>、由<sup>38</sup>先已悟<sup>39</sup>煩惱本空<sup>40</sup>、心性本淨<sup>41</sup>故、於惡<sup>42</sup>斷而無斷<sup>43</sup>、於善<sup>44</sup>修而無修<sup>45</sup>、爲眞修斷<sup>46</sup>矣。問、若悟<sup>47</sup>了復修者<sup>48</sup>、(21 a) 據前夢喻<sup>49</sup>、豈不<sup>50</sup>似<sup>51</sup>覺<sup>52</sup>來更求<sup>53</sup>出獄<sup>54</sup>脫枷<sup>55</sup>乎。答、前<sup>56</sup>但頓悟義<sup>57</sup>、不喻<sup>58</sup>漸修<sup>59</sup>。良由法有<sup>60</sup>無量義<sup>61</sup>、豈唯<sup>62</sup>一義<sup>63</sup>。故涅槃經<sup>64</sup>、雖唯談佛性<sup>65</sup>、而以百喻<sup>66</sup>、各有既會<sup>67</sup>、不可亂用<sup>68</sup>。今明漸修喻<sup>69</sup>者、如水被風<sup>70</sup>激<sup>71</sup>、成多波浪<sup>72</sup>、便有漂溺之殃<sup>73</sup>、或陰寒之氣<sup>74</sup>、結成冰凌<sup>75</sup>、即阻漑滌<sup>76</sup>之用<sup>77</sup>、然水之濕性<sup>78</sup>、雖動靜凝流<sup>79</sup>、而未嘗變易<sup>80</sup>。水者、喻真心<sup>81</sup>也。風者、無明也。波浪者、煩惱也。(21 b) 漂溺者、輪迴六道<sup>82</sup>也。陰寒者、無明貪愛之習氣也。結成冰凌者、堅執四大雙質礙也。即阻漑滌<sup>83</sup>、漑<sup>84</sup>、喻雨大法雨<sup>85</sup>、滋潤群生<sup>86</sup>、生長道芽<sup>87</sup>。滌<sup>88</sup>、喻蕩除煩惱<sup>89</sup>、迷皆不能<sup>90</sup>、故云阻<sup>91</sup>也。然水之濕性<sup>92</sup>、雖動靜凝流<sup>93</sup>、而未嘗變易<sup>94</sup>者、喻貪嗔時亦知<sup>95</sup>、慈濟時亦知<sup>96</sup>、憂喜哀樂<sup>97</sup>、種種變動<sup>98</sup>、未嘗不知<sup>99</sup>、故云不變<sup>100</sup>也。今頓悟本心常知<sup>101</sup>、如識<sup>102</sup>不變<sup>103</sup>之濕性<sup>104</sup>、心既無迷<sup>105</sup>、即非無明<sup>106</sup>、如風頓止<sup>107</sup>、悟後自然<sup>108</sup>、攀緣漸<sup>109</sup>(22 a) 息<sup>110</sup>、如波浪漸停<sup>111</sup>、以戒定慧<sup>112</sup>、資薰身心<sup>113</sup>、漸漸自在<sup>114</sup>、乃至神變無礙<sup>115</sup>、普利群生<sup>116</sup>、名之爲佛<sup>117</sup>、如春陽水泮<sup>118</sup>、漑滌<sup>119</sup>利<sup>120</sup>萬物<sup>121</sup>也。洪州常云<sup>122</sup>、貪嗔慈等皆是佛性<sup>123</sup>。有何別<sup>124</sup>者<sup>125</sup>、如人但觀濕性<sup>126</sup>、始終無異<sup>127</sup>、不<sup>128</sup>知濟舟<sup>129</sup>覆舟<sup>130</sup>、功過懸殊<sup>131</sup>、故彼宗於頓悟門<sup>132</sup>、雖近<sup>133</sup>而未<sup>134</sup>的<sup>135</sup>、於漸修門<sup>136</sup>、有誤

36 (七)ハ「七寶三千界」ヲ「三千七寶」ニ作ル  
 37 (法)ハ「今」以下五四字ナシ  
 38 (七)ハ欠丁アリ、頭注ニ「性常之閒佚失十六字詰十八行」トアル  
 39 (法)ハ「相傳」ヲ「傳授」ニ作ル  
 40 (法)ハ「探」ヲ「簡」ニ作ル  
 41 (法)ハ「正」ノ下ニ「也」アリ  
 42 (法)ハ「已」ヲ「與」ニ作ル  
 43 (法)ハ「難卒」ニ作ル  
 44 (法)ハ「惡」ノ下ニ「斷」アリ  
 45 (法)ハ「善」ノ下ニ「修」アリ  
 46 (法)ハ「若」ナシ  
 47 (法)ハ「豈」ヲ「世事」ニ作ル  
 48 (法)ハ「以」ヲ「八」ニ作ル  
 49 (法)ハ「既會」ヲ「配合」ニ作ル  
 50 (底)ハ「水」ニ作ルモ、(法)ニヨリ改ム  
 51 (底)ハ「也」ナキモ、(法)ニヨリ補ウ  
 52 (底)ハ「寒」ノ下ニ「之氣」アリ  
 53 (底)ハ「水」ニ作ルモ、(法)ニヨリ改ム  
 54 (法)ハ「滌」ノ下ニ「之用者」アリ  
 55 (底)ハ「漑」ナキモ、(法)ニヨリ補ウ  
 56 (底)ハ「湯」ニ作ルモ、(法)ニヨリ改ム  
 57 (法)ハ「喻」ナシ  
 58 (法)ハ「種種」ナシ  
 59 (法)ハ「常」ノ一字上マデヲ欠ク  
 60 (法)ハ「識」ナシ  
 61 (法)ハ「戒」ナシ  
 62 (法)ハ「如」以下四字ナシ  
 63 (法)ハ「名」以下ナシ  
 64 (法)ハ「漑」ノ下ニ「濯洗」アリ

而全乖。牛頭已達空二故、於頓悟門二而半了、以忘情二故、於漸修門二而無虧。北宗但是漸修、全無頓悟、無頓悟故、修亦非真。(22 b) 荷澤則必先頓悟、依悟二而修。故經云、若諸菩薩、悟淨圓覺、△悟也。▽以淨覺心取靜、爲行由澄諸念、覺識煩惱動等。△修也。▽此頓悟漸修之意、備於一藏大乘、而起信・圓覺・華嚴是其宗也。若約各爲一類之機、善巧方便、廣開門戶、各各誘引、熏生生之習種、爲世世之勝緣、則諸宗所說、亦皆是諸佛之教。諸經論具有其文也。(23 a)

△三) 蕭相公所呈見解、呈上草堂和尚、與注釋。荷澤云、見清淨體、於諸三昧八萬四千諸波羅蜜門、皆於見上一時起用、名爲慧眼。若當眞如相應之時、△善惡不思。空有不念。▽萬化寂滅、△萬法俱從思想緣念而生、皆是虛妄、故云化也既一念不生、則萬法不起。故不待三泯之、自然寂滅也。▽此時更無所見。△照體獨立。夢智亡階。▽三昧諸波羅蜜門、亦一時空寂、更無所得。△散亂與三昧、此岸與彼岸、皆是相待對治之說。若知念無念見性無性、則定亂眞妄一時空寂、故無所得故。▽不審此是見上一時起用否。△然見性圓明、理絕相累。即(23 b) 絕相爲妙用、住相爲執情。於八萬法門一一皆爾。但一法有、爲一塵。一法空、爲一用。故云見清淨則一時起用一矣。▽望

- 65 (正)ハ「濼」ノ下ニ「善」アリ
- 66 (正)ハ「等」ヲ「善」ニ作ル
- 67 (底)ハ「有誤」ナキモ、(正)ニヨリ補
- 68 (正)ハ「乖」ヲ「垂」ニ作り、頭注ニ「垂疑乖」トアル
- 69 (正)ハ「已」ヲ「以」ニ作ル
- 70 (底)ハ「無」以下四字程虫食イノ爲不明ニヨリ、(正)ニヨリ補正ス
- 71 (正)ハ「惱」ナシ
- 72 (正)ハ「教」ノ下ニ「也」アリ
- 73 (正)ハ「論」ノ上ニ「諸」アリ
- 74 (正)ハ「也」ヲ「矣」ニ作り、「中華傳心地禪門師資承襲圖」ノ尾題アリ
- 1 (景)ハ「蕭」ノ下ニ「倪」アリ
- 2 (景)ハ「所」ナシ
- 3 (景)ハ「呈」ノ下ニ「已」アリ
- 4 (景)ハ「呈」以下七字ヲ「請禪師」ニ作ル
- 5 (景)ハ「釋」ノ下ニ「曰」アリ
- 6 (底)ハ「密」ニナルモ、(景)ニヨリ改ム
- 7 (景)ハ「若」ヲ「又」ニ作ル
- 8 (景)ハ「妄」ヲ「空」ニ作ル
- 9 (景)ハ「見」ノ下ニ「見」アリ
- 10 (底)(景)ハ「密」ニ作ルモ、「蜜」ニ改ム
- 11 (景)ハ「智」ナシ
- 12 (景)ハ「念」ヲ「心」ニ作ル
- 13 (景)ハ「性」ヲ「生」ニ作ル
- 14 (景)ハ「故」ヲ「也」ニ作ル
- 15 (景)ハ「但」ナシ

於此後ニ示及。俛狀。

〔二四〕△答史山人十問。△問答各是一本、今參而寫之。▽草堂和尚答。一問、云何是道。何以修之。爲復必須修成。爲復不假功用。答、無礙是道。覺妄是修。道雖本圓、妄起爲累。妄念都盡、卽是修成。

二問、道若因修而成、卽是造作。便同世間法、虛僞不實、成而復壞。何名出世。答、造作雖(24a)是結業、名虛僞世間、無作是修行、卽真實出世。

三問、其所修者、爲頓爲漸。漸則忘前失後、何以集合而成。頓則萬行多方、豈得一時圓滿。答、眞理卽悟而頓圓、妄情息之而漸盡。頓圓如初生

孩子、一日而肢體已全。漸修如長養成入、多年而志氣方立。

四問、凡修心地之法、爲當悟心卽了、爲當別有行門。若別有行門、何名南宗頓旨。若悟卽同諸佛、(24b)何不發神通光明。答、識冰池而全水、

藉陽氣而鎔融。悟凡夫而卽眞、資法力ニ而修習。冰消則水流潤、方呈溉滌之功。妄盡則心靈通、始發通光之應。修心之外、無別行門。

五問、若但修心而得佛一者、何故諸經復說必須莊嚴佛土、教化衆生、方名成道。答、鏡明而影像千差、心淨而神通萬應。影像類莊嚴佛國、神通類

16 (景)ハ「淨」ノ下ニ「體」アリ

1 (祖)ハ「答」ヲ「有時」ニ作ル

2 (祖)ハ「問」以下ノ割注ナシ

3 (景)ハ「草」以上五字ナシ

4 (祖)ハ「答」問「第一問曰」ニ作ル

5 (底)ハ「爲復……爲復」ヲ「爲」ノ右側ニ「セハ」ト送りガナヲ付スモノ、ハ

タニ改ム。以下同様ノ例アリ

6 (祖)ハ「答」ヲ「禪師答曰」ニ作ル

7 (底)ハ「大」ニ作ルモノ、(祖)(景)ニヨリ改ム

8 (底)ハ「卽」ノ下ニ「盡卽」ノ衍字アリ

9 (祖)ハ「二」ノ上ニ「第」アリ、以下同

10 (祖)ハ「問」ノ上ニ「曰」アリ、以下同

11 (祖)ハ「答」ノ上ニ「師」アリ、「答」ノ下ニ「曰」アリ、以下同

12 (祖)ハ「雖」ヲ「唯」ニ作り、(景)ハ「雖」ナシ

13 (底)ハ「頓」ナキモノ、(祖)(景)ニヨリ補ウ

14 (底)ハ「ノカ」ノ送りガナルモノ、削ル

15 (景)ハ「融」ヲ「消」ニ作ル

16 (祖)ハ「則」ヲ「卽」ニ作ル

17 (景)ハ「類」ナシ

18 (祖)(景)ハ「類」ナシ

則教化衆生。莊嚴而即非莊嚴、影像亦色而非色。(25 a)

六問、諸經皆說度脫衆生。且衆生即非衆生、何故更勞度脫。答、衆生若是實度之即爲勞。既自云即非衆生、何不例度而無二度。

七問、諸經說佛常住、或即說佛滅度。常即不滅、滅即非常。豈不相違。答、離一切相即二名諸佛、何有出世入滅之實乎。見出沒二者在于機緣。機緣應、

則菩提樹下而出現。機緣盡、則娑羅林閉而涅槃。其猶淨水無心、無像不現。像非我(25 b)有、蓋外質之去來。相非佛身、豈如來之出沒。

八問、云何佛化所生、吾如彼生、佛既無生、生是何義。若言心生法生、心滅法滅、何以得無生法忍耶。答、既云如化、化即是空。空即無生、何詰

生義。生滅滅已、寂滅爲眞。忍可此法、無生、名曰無生法忍。

九問、諸佛成道說法、只爲度脫衆生、衆生既有六道、佛何但住在人中一現化。又佛滅後付法於(26 a)迦葉、以心傳心、乃至此方七祖每代、只

傳一人、既云於一切衆生、皆得二子之地、何以傳授不普。答、日月麗天、六合俱照、而盲者不見、盆下不知。非日月不普、是障隔之咎也。

度與不度、義類如斯。非局人天、揀於鬼畜。但人道能結集、傳授不絕、故只知佛現人中一也。滅度後、委付迦葉、展轉相承、一人者、此亦蓋論當代爲

19 (祖)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

20 (景)ハ「像」ノ下ニ「而」アリ

21 (景)ハ「而」ナシ

22 (景)ハ「即」ヲ「則」ニ作ル

23 (底)ニ「即」ナキモ、(祖)景ニヨリ

24 (底)ハ「相」ナキモ、(祖)景ニヨリ

25 (祖)ハ「于」ヲ「乎」ニ作ル

26 (底)ハ「機」ナキモ、(祖)景ニヨリ

27 (祖)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

28 (祖)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

29 (底)ハ「之」ナキモ、(祖)景ニヨリ

30 (景)ハ「耶」ヲ「邪」ニ作ル

31 (底)ハ「無」ナキモ、(祖)景ニヨリ

32 (景)ハ「只」ヲ「祇」ニ作ル

33 (景)ハ「只」ヲ「祇」ニ作ル

34 (景)ハ「只」ヲ「祇」ニ作ル

宗教主、如<sup>三</sup>土無<sup>二</sup>三王、非得度者、唯爾數也。(26 b)

十問、和尚因何<sup>一</sup>發心、慕何法<sup>二</sup>而出家。今如何修行。得何法味<sup>三</sup>。所行<sup>一</sup>得

至何處地位<sup>一</sup>。今住心<sup>二</sup>耶、修心<sup>三</sup>耶。若住心<sup>一</sup>、妨修心<sup>二</sup>。若修心<sup>一</sup>、則動念不

安。云何名爲學道<sup>一</sup>。若安心一定<sup>二</sup>、則何異定性之徒。伏願大德、運大慈悲、

如理<sup>一</sup>、如如<sup>二</sup>、次第爲說<sup>一</sup>。長慶四年五月日史制誠謹問。答、覺四大如坏幻、

達六塵如<sup>一</sup>空花、悟自心<sup>二</sup>爲佛心、見本性<sup>三</sup>爲法性、是發心也。知心無住<sup>一</sup>、

即是修行。(27 a) 無住而知、即爲法味。住著於法<sup>一</sup>、斯爲動念。故如人下

入闇<sup>一</sup>、則無所見<sup>上</sup>。今無所住、不染不著<sup>一</sup>、故如下人有目、及日光明、見種種

法<sup>一</sup>、豈爲定性之徒<sup>一</sup>。既無所住著<sup>一</sup>、何論處所階位<sup>一</sup>。四月二日、沙門宗密謹對。

△史山人自後頻對論心地。及至出家爲道。▽

〔二五〕△又答山南溫尚書所問。先奉問、悟理<sup>一</sup>息妄<sup>二</sup>之人、不結業<sup>三</sup>、一期壽終<sup>四</sup>之

後、靈性何依者<sup>一</sup>。對。一切衆生、無不<sup>二</sup>具<sup>三</sup>有覺性、靈明空寂、與佛無殊<sup>四</sup>。

但以<sup>三</sup>(27 b) 無始劫來<sup>一</sup>、未<sup>二</sup>曾<sup>三</sup>了悟、妄執身<sup>四</sup>爲我相、故生愛惡等情<sup>五</sup>。隨

情<sup>一</sup>造業<sup>二</sup>、隨業受報<sup>三</sup>、生老病死、長劫輪迴。然身中覺性、未<sup>二</sup>曾<sup>三</sup>生死<sup>四</sup>。如夢

被<sup>レ</sup>驅役<sup>一</sup>、而身<sup>二</sup>本安閑<sup>三</sup>。如水作冰<sup>四</sup>、而濕性不易<sup>五</sup>。若能悟此性<sup>六</sup>、即是

法身<sup>一</sup>、本自無生<sup>二</sup>、何有依託。靈靈不昧、聲聞<sup>三</sup>常知、無所從來<sup>四</sup>、亦無所去<sup>五</sup>。

35 (景)ハ「邪」ニ作ル

36 (景)ハ「邪」ニ作ル

37 (底)ハ「覺」ニ作ルモ、(祖)景ニヨ

38 (底)ハ「則」ニ作ル

39 (祖)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

40 (景)ハ「長」以下二字ナシ

41 (景)ハ「花」ヲ「華」ニ作ル

42 (祖)ハ「則」ヲ「即」ニ作ル

43 (底)ニ「之」ナキモ、(祖)景ニヨリ

44 (景)ハ「階」以下二八字ナシ

45 (祖)ハ「四」ノ上ニ「同年」アリ、マ

46 (祖)ハ「類」ノ字ハ不明。花園大学油

47 (祖)ハ「煩」ニ作ル

1 (林)ハ「又」以下一二字ヲ「唐溫尚書

2 (景)ハ「答」ナシ

3 (景)ハ「所」ノ下ニ「造」アリ

4 (景)ハ「無」ナシ

5 (景)ハ「先」以下三字ナシ

6 (林)ハ「不」ノ下ニ「復」アリ

7 (林)ハ「著對」ヲ「密以書答之曰」ニ

8 (景)ハ「對」ヲ「答」ニ作ル

9 (林)ハ「有」以下七字ヲ「覺靈空寂」

10 (底)ハ「隨業」ナキモ、(景)ニヨリ補

然、多生妄執、習已性成、喜怒哀樂、微細流注。眞理雖已頓達、此情難卒除。須長時覺察、損之又損、如風(28 a)頓止、波浪漸停。豈可一生所修便同諸佛力用。但可以空寂爲自體、勿認色身。以靈知爲自心、勿認妄念。妄念若起、都不隨之、即臨命終時、自然業不能繫。雖有二中陰、所向自由、天上人間、隨意寄託。若愛惡之念已泯、即不受分段之身、自能易短爲長、易羸爲妙。若微細流注、一切寂滅、唯圓覺大智、朗然獨在、即隨機應現千百億身、度有緣衆生、名之爲佛。謹對。(28 b)

釋曰、馬鳴菩薩、撮略百本大乘經宗旨、以造大乘起信論。論中立宗、說一切衆生心、有二覺義不覺義、覺中復有本覺義始覺義。上所述者、雖但約照理觀心處言之、而法義亦同彼論。謂從初至與佛無殊、是本覺也。從但以無始下、是不覺也。從若能悟此二下、是始覺也。始覺中復有頓悟漸修。從此次至亦無所去、是頓悟也。從然多生妄執二下、是漸修也。漸修中(29 a)從初發心乃至成佛、有三位自在。從此至隨意寄託者、是受生自在也。從若愛惡之念下、是變易自在也。從若微細流注二下至末、是究竟自在也。又從但可以空寂爲自體、至自然業不能繫、正是悟理之人、朝暮行心修習止觀之要節也。

- 11 (林)ハ「迴」ヲ「回」ニ作ル
- 12 (林)ハ「役而」ヲ「使」ニ作ル
- 13 (底)ハ「冰」ヲ「水波」ニ作ルモ、(景)
- 14 (林)ハ「易」リ改ム
- 15 (林)ハ「性」ヲ「異」ニ作ル
- 16 (林)ハ「依」ヲ「倚」ニ作ル
- 17 (景)ハ「生」ノ下ニ「習」アリ
- 18 (林)ハ「生」ノ下ニ「習」アリ
- 19 (林)ハ「習」ナシ
- 20 (景)ハ「已」ヲ「以」ニ作ル
- 21 (景)ハ「已」ヲ「然」ニ作ル
- 22 (景)ハ「頓」ヲ「顯」ニ作ル
- 23 (景)ハ「難」ノ下ニ「以」アリ
- 24 (景)ハ「時」ナシ
- 25 (林)ハ「生」ヲ「身」ニ作ル
- 26 (林)ハ「諸」ナシ
- 27 (林)ハ「力」ナシ
- 28 (林)ハ「靈」ヲ「眞」ニ作ル
- 29 (底)ハ「妄念」ナキモ、(景)ハ「念」ニヨリ補フ
- 30 (林)ハ「念」ナキモ、頭注ニ「之下一有念字」トアル
- 31 (林)ハ「即」ナシ
- 32 (林)ハ「能」ヲ「然」ニ作ル
- 33 (底)ハ「爲」ヲ「而」ニ作ル
- 34 (林)ハ「唯」ナシ
- 35 (景)ハ「在」ヲ「存」ニ作ル
- 36 (林)ハ「機應」ナシ
- 37 (林)ハ「爲」ヲ「日」ニ作ル
- 38 (林)ハ「謹」以下ナシ
- 39 (底)ハ「從」ヲ「徒」ニ作ル

宗密先有八句之偈、顯示此意、書於尙書處誦之、奉令解釋、今謹注釋如後、  
 偈<sup>45</sup>曰。作有義事、是醒悟心。△義謂義理、非謂(29b)仁義恩義。意明  
 凡所作爲、先詳利害、須有所以當於道理、然後行之、方免同悟醉顛狂  
 之人也。<sup>43</sup>就佛法中、有三種義、即可爲之。一資益色身之事。謂、衣食醫  
 藥房舍等世間義也。二資益法身、謂、戒定慧六波羅蜜等第一義也。三弘正  
 法、利濟羣生、乃至爲法、諸餘緣事。通世出世也。▽作無義事、是狂亂心。  
 △謂、凡夫所爲、若不緣<sup>51</sup>上三般事、即名無義也。是狂亂者、且如世間  
 醉人狂人所往、不揀處所、所作不量是非、今既不擇、有何義利。但縱信妄念、  
 要爲<sup>57</sup>即爲、故<sup>58</sup>如狂也。上四句述業因也。下四句述受果報云。▽狂亂隨  
 情念、臨終被業牽<sup>59</sup>。△既隨妄念、欲作<sup>60</sup>即作、不下以悟理之智、揀擇是非。  
 猶如狂人、故臨終、於業道被業所引、受當來報。故涅槃經云、無明、郎主  
 貪愛、魔王、役使身心、策如僮僕。▽醒悟不<sup>61</sup>由情、臨終能轉業。△情中  
 欲作<sup>62</sup>、而察理不應、即須便止。情中不欲作、而照理應爲、即須便作。但  
 由是非之理、不由愛惡之情、即臨命終時業不能繫、隨意自在天上人間也。  
 通而言之、(30a)但朝暮之閒所作、被情塵所牽、即臨終被業所牽、而  
 受生。若所作所爲、由於覺智、不由情塵、即臨終由我自在而受生、不

40 (底)ハ「託」ヲ「托」ニ作ル  
 41 (底)ハ「是」ナキモ、(景)ニヨリ補ウ  
 42 (景)ハ「也」ナシ  
 43 (景)ハ「書」ヲ「會」ニ作ル  
 44 (景)ハ「令」ヲ「命」ニ作ル  
 45 (底)ハ「曰」ナキモ、(景)ニヨリ補ウ  
 46 (景)ハ「醒」ヲ「惺」ニ作ル  
 47 (底)ハ「首」ニ作ルモ、(景)ニヨリ改ム  
 48 (底)ハ「也」ナキモ、(景)ニヨリ補ウ  
 49 (景)ハ「二」ヲ「二」ニ作ル  
 50 (底)(景)ハ「密」ニ作ルモ、「蜜」ニ改ム  
 51 (景)ハ「夫」ナシ  
 52 (景)ハ「所」ノ下ニ「作」アリ  
 53 (底)ハ「終」ノ下ニ「時」アリ  
 54 (景)ハ「醒」ヲ「惺」ニ作ル  
 55 (景)ハ「理」ノ下ニ「相」アリ  
 57 (景)ハ「爲」ナシ

由業<sup>ニ</sup>也。當知<sup>ニ</sup>欲驗<sup>ハ</sup>臨終<sup>ニ</sup>受<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>自在<sup>ト</sup>不自在<sup>ト</sup>、但驗<sup>下</sup>尋常<sup>ノ</sup>行<sup>ハ</sup>心<sup>ヲ</sup>於塵境<sup>ニ</sup>自由不  
自由<sup>ト</sup>。▽

58(底)ハ「驗」ナキモ、(景)ニヨリ補ウ

裴休拾遺問

1(景)ハ「裴」以下ナシ

不斷臂之信者、不可授之。必必必必(30 b)

仁治二年(辛丑)▽神無月四日、越中國新州郡新條庄、於戊剋、書寫之了。

道願房善緣、生年卅九歲。

南無三寶、南無三寶。(31 a)